

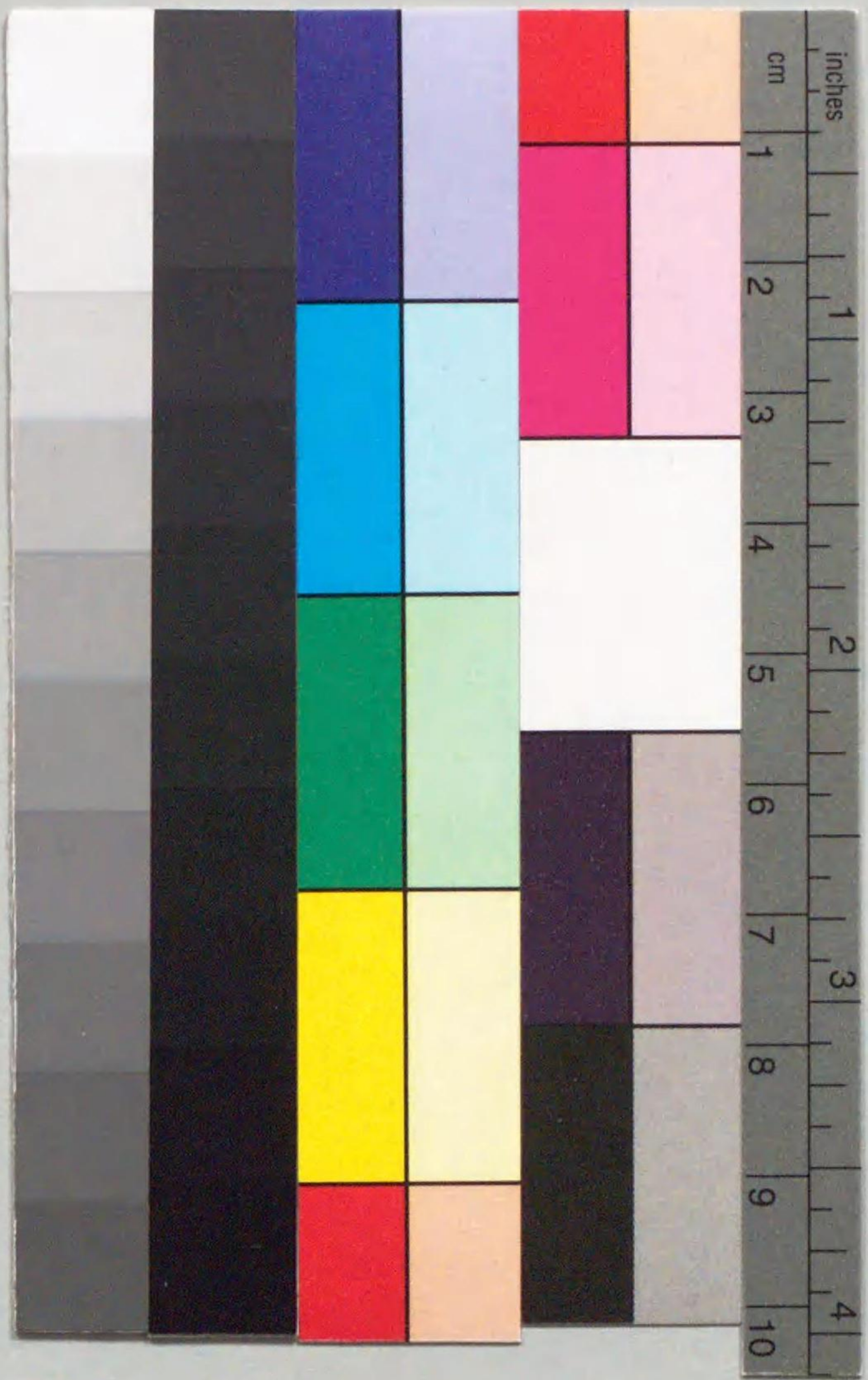
340-3

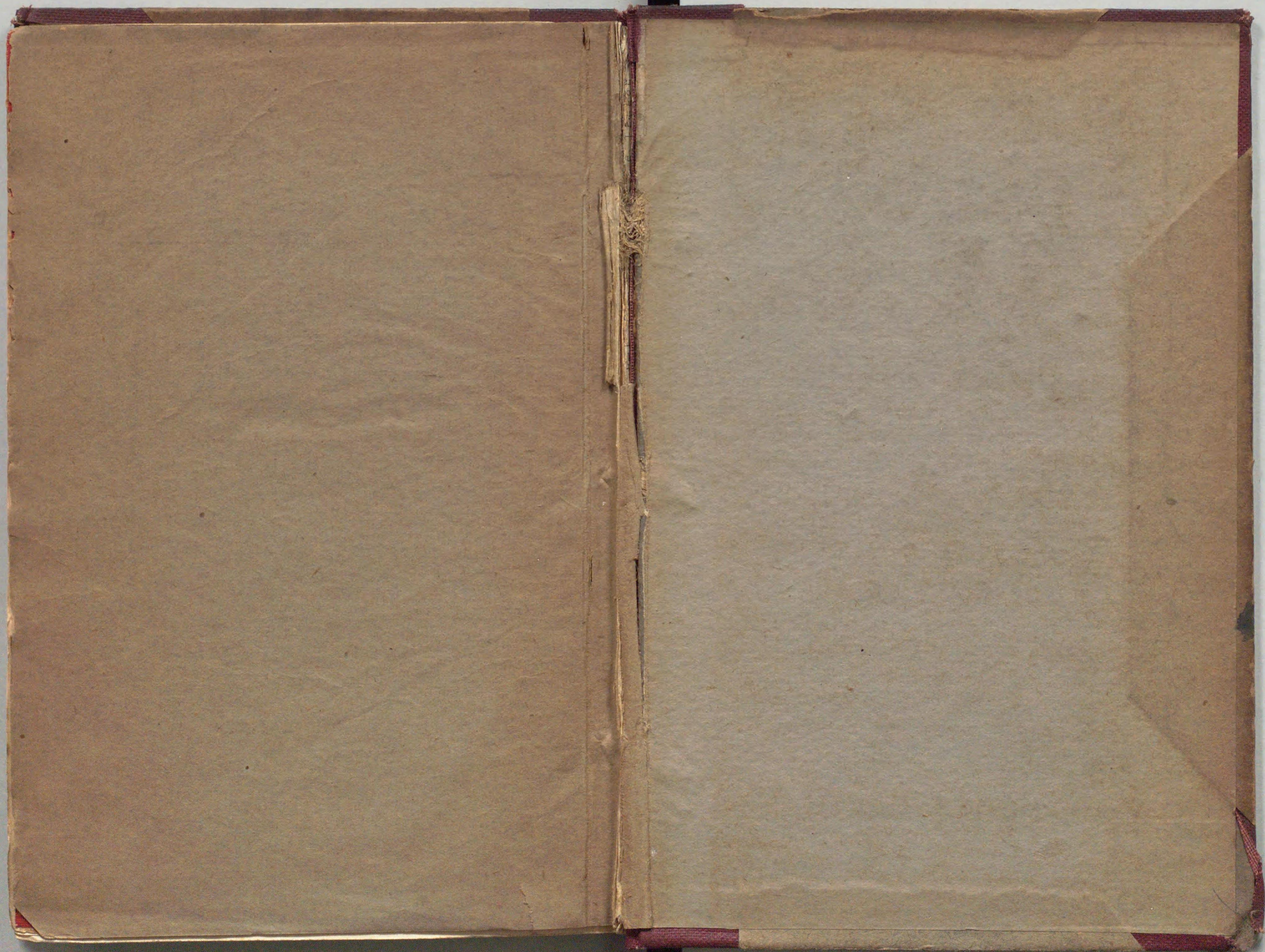


1200501398138

240
3

M





340



340-2

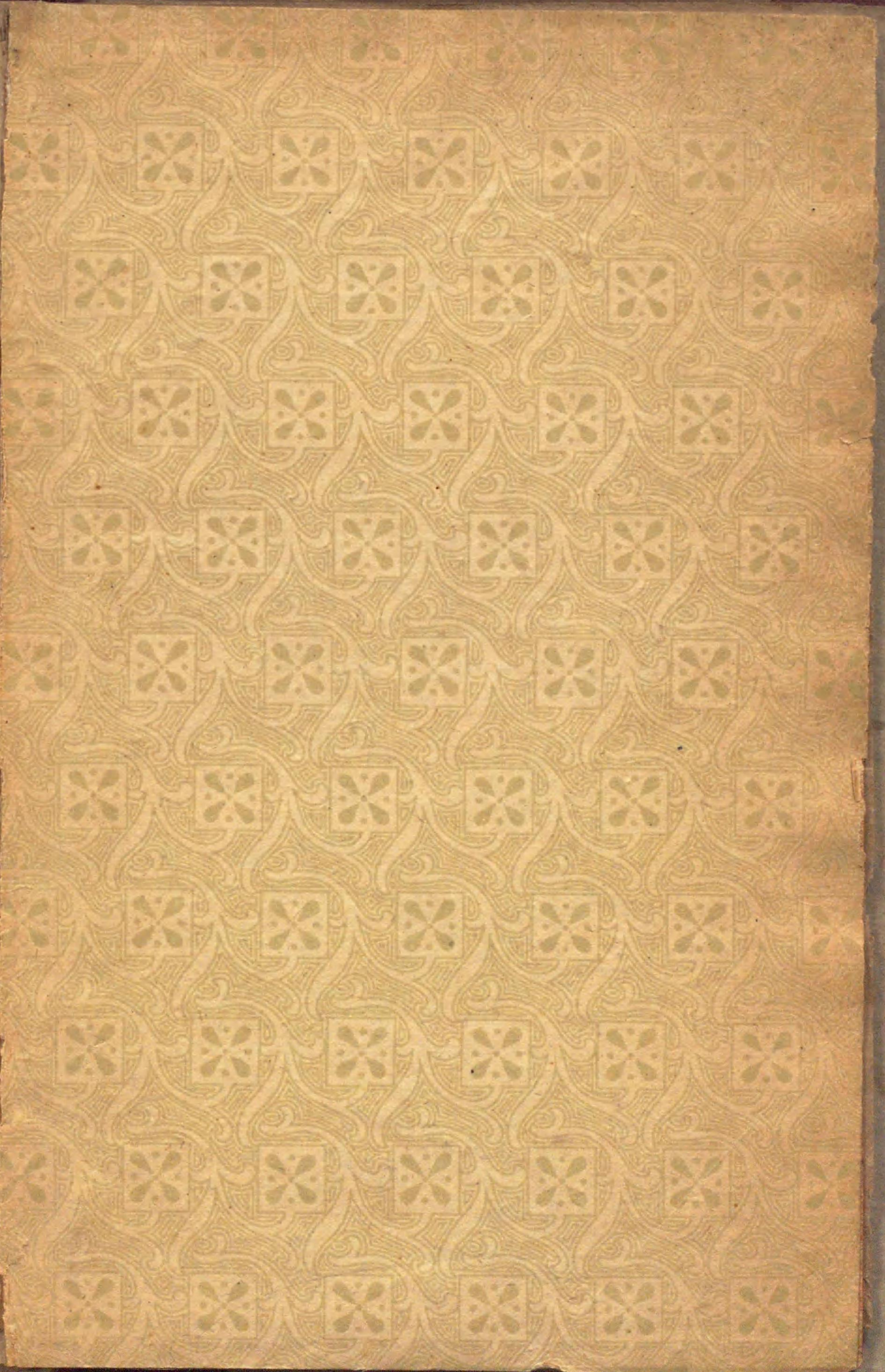
編共 郎 五 正 井 坪
浩 正 戸 織



嚟昔のトツベテ

京 東
行 發 社 文 積

44.12.27
内交



序

今度坪井博士とかねて研究と趣味とに富める織戸君とが共に
 編纂された此の『西藏の昔噺』を繙讀致しました。かゝる話は
 誰れでも興味を感じざる事ではありませんが、其の話の眞味を玩味致し
 ますと、其の土地の風俗とか、習慣とか、又は人情とか、尙明かに知
 る事が出来て、一層興味を深く覚える所であります。

そこで此の『西藏の昔噺』を通讀して見ますと、舌を出して敬禮
 をする風俗や、強い虎が小さい兎に敗けた話やら、何れも恩に酬ひ、
 善を勧め、惡を懲すなど、全紙面悉く『誠』と云ふ事が、經となり緯と
 なつて表れて居るのを見受けますが、實に『誠』と云ふもの程大切

な事はありません。我國と西藏とは所こそ違へ、古今東西何れの時代でも『誠』と云ふ事は皆同じであります。

中庸と云ふ書物の中に『誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり』とあります、即ち此の宇宙にある萬物の生々化々するの道は天の道であつて、其の道たるや何等の偽りなき誠であります、例へば彼の松竹梅の如きは何れも其本分を守つて決して松には竹の葉を生ぜず、又竹は松の形せずして亦梅の香もなきは皆天の道に順つて能く其の誠をつくすのであります。獨り松竹梅のみに止まらず、凡べての植物、凡べての動物は皆各々其の本分を守り、等しく天の誠を稟けて、而かも克く彼れ自から之を誠にするのであります。

斯くの如く、動植物の悉く天の道に順ふものとせば、萬物の靈長たる吾々人にして天の道に順はぬ筈は決してないのであります。然るに吾々多くの人間の中には、人面獸心などと云ふ恐ろしい人や、尙惡獸毒蛇よりも一層恐るべき人がありますのは誠に歎ずべき次第ではありませんか。

夫れでありますから、諸君は此の『西藏の昔噺』を唯だ事柄の面白いと云ふ計りでなく、『誠』と云ふ事によく心掛けて、而かも尙進んで此の『誠』を日々々の事に及ぼして頂きたいと思ふのであります。こは私一人の考へではなく、亦編者も共に希ふ所であります。

明治四十四年十二月十日

南葵文庫北窓の下に

徳川頼倫

今茲に發行致しました西藏の昔噺と謂ひますのは、西藏に於ける面白い土着の傳説を集めたものであります。

西藏と謂ひます國は諸君も知らるゝ通り、同じ亞細亞の中で、今大騒ぎをして居る支那の一部でありますが、昔から外國人の入るのを禁じまして、世界の秘密國と呼ばれた所であります。

元來口碑傳説の取調べと云ふものは、中々難事であります。と謂ふのは、西藏に於ける昔噺類は大抵印度、支那邊から輸入したものであつて、西藏の特色と見るべきものが少しも加味されて居らないし、殊に物語と謂ふものは、其の語る人の巧拙に應じて非常に影響を及ぼすものでありますから、面白い土着の傳説も下手な人に語らすと殆んど一顧の價値もない様になるからであります。

本書に集めた西藏の昔噺は、長らく西藏に滞在して彼の地の口碑傳説を取調べられた英國人オ、コーナー氏の著書に負ふ所が多

大であります。茲に深く感謝する所であります。始めに掲げた「西藏人と其風俗」は、理學博士坪井正五郎氏の執筆されたものであります。今少し詳細に書るゝ筈でありましたが、丁度歐米漫遊の間際でありましたから、何れ第二編よりは、種々なる國の面白い昔噺やら、其他種々の面白い土産話と共に諸君の前に出版さるゝ事でありませす。

明治四十四年十二月十日

東都牛込の寓居にて

編者の一人 織戸正滿識す

西藏の昔噺目次

西藏人と其風俗……………一

(一) 虎と人 其一……………三

(二) 虎と人 其二……………三

(三) 人食鬼の城……………三

(四) 裂けた唇の兎……………五

(五) 金持ちと貧乏人……………六

(六) 山羊と狼と狐と兎との話……………七

(七) 馬鹿な回々教徒……………七

(八) 猫と鼠……………一〇〇

(九) 蛙と鴉……………一〇六

(一〇) 鼠と其三匹の子……………一〇九

(一一) 三人の泥棒……………一一二

(一二) 兎と獅子との話……………一一五

(一三) 狐と兎とに欺された狼其一……………一二四

(一四) 狐と兎とに欺された狼其二……………一二六

(一五) 鼠の國……………一三七

(一六) 不具な子供の話……………一三九

(一七) 口から金貨を吐き出す獅子……………一四二

(一八) バチヤとバキの話……………一四五

(一九) 豹を恐れた虎……………一五〇

挿入圖版の目次

(一九) 仙人の下僕……………二二七

(二〇) 龜と猿……………二二九

(二一) 家出した子供其一……………二二六

(二二) 家出した子供其二……………二四六

(二三) 家出した子供其三……………二五四

(一) チベットの婦人と男兒……………寫真版

(二) 衣服の一種……………寫真版

(三) ラマ宗の懸物襟巻き、木製の椀、廻轉する經筒、箆……………寫真版

(四) チベットの男子が敬禮をするところ……………寫真版

- (五) 兎と虎……………石版
- (六) 慾深き男が雀の子を取る……………石版
- (七) お父ちやん私はこんなものになりました……………石版
- (八) 自分の影を恐れた回々教徒……………石版
- (九) 蛙を啄まんとする鴉……………石版
- (一〇) 怪しき鳥を呑まんとする大蛇……………石版
- (一一) お金を吐き出す石の獅子……………石版
- (一二) 龜の巢へ行つて『さあ寝やう々々』と云ふ猿……………石版

世界昔噺集 第一編 西藏の昔噺

西藏人と其風俗

坪井正五 織戸正滿 共編

チベットの昔話は、唯斯う云ふ昔話だと思つて、讀んでも面白くは
 違ひありませんが、これを語り傳へて居るチベット人とは如何なる
 もので、其人達の風俗はどんなで有るかとの事を知つた上で見るな
 らば、興味は一層深いので有りませう。若し彼れ此れ補ひ合つて、樂
 みの間にチベット人に付いての事を、幾分たりとも明かにする事
 出来るならば、誠に幸な事であると思ふので有ります。

一體チベットと云ふ國は、支那本部の西、印度の北に當る所で、高い山の多い土地で有りますが、其住み惡さうな場所に、一種類の人間が居るので有ります。チベットにも他所から來た者が雜ざり込んで居るし、本國人と外國人との間の子も有る事有りますから、此所に住んで居る者が皆斯うで有ると云ふのでは有りませんが、主な者に付いて云つて見ると、其身體の性質は次の通りで有ります。

大人の男は身の丈が五尺四寸許り、何所でも女は、男よりも小さい者で有りますが、此所では大した違ひは無く、詰り男も女も日本人よりは大きい。髪の毛は黒くて、うねり氣味。頭の幅は廣く、頬骨は高く、耳は張り出した様に成つて居る。目は小さく、口は大き

く、唇は薄く、齒は丈夫では有るが不揃ひ、鼻は低い事も有り、鳶の嘴の様に反つて居る事も有る。膚の色は褐色の薄いの



チツトの婦人と男兒

のが常で有るが白い事も有る。眼の色は薄い褐色又は栗色。肩は廣く、腕は太く、脚は瘠せて居て足先は大きい。

髪の毛はどうして居るか、と云ふと、男の中で回々教の信者に成つて居る者は短く切つて、頭全體を布で包んで居るが、一般には、總

體を三つ打ちにして後に垂れて居るので有ります。女は髪を紐の様に編んで背の方で纏め、頭の頂上から後の方へ掛けて、金屬や美しい石で作つた澤山の細工品を付けた飾りを被ぶつて居る。丁度、小間物屋の荷を頭に載せて居る様なもので有ります。男は少し計りの上ひげを生やす事も有りますが、延ばさないのが普通であります。他には生える事も少なく、偶々生えると毛抜きで丁寧に抜き去つて仕舞ふので有ります。

着物は毛織り、又は毛皮で作るのが元來の風で有りますが、貴い人や富んで居る人の中には、支那から來た様々の好い布類を用ゐる者も有ります。全體の形は、筒袖の日本服の様で、裾も長く、襟も深く重なる様に出來て居る。之を着るには先づ襟の所を頭に被

衣 服 の 一 種



たばこ入れ

むぎ粉入れ

ふり、其儘で帯を締め、襟を肩の所に下ろし、帯の上で着物をたるませると腹の所から脇と、背へ掛けて袋の様なものが出來る。其様子は丁度日本の女が帯を締めやうとする前に、紐で腰を縛つた時のやうなので有ります。着物の下には股引きを穿く。男は好く左の方を片肌脱ぎにして居る。頭には屢ば毛織り毛氈又は毛皮で作つた帽を戴き、足には常に靴を穿き、胸には美しい飾りをした守り袋を懸ける。これが先づ身に着ける物の

大略あらましで有ります。チベット人の着物には袂たもとも無く衣囊かぶしも有ります。せんが、細こまかい手廻りの持ち物は腰こしの周圍まわりのたるみの中に入れて、紐ひもを付けて帯おびに結び下げたりして置くので有ります。

次に住居すまひの事で有りますが、チベット人の中には湖水こすゐや河がほに臨のぞんだ野原のほらに居て、彼方かなた此方こなた動き廻まはつて居る者と、谷間たにまに居て住所しよ所を定めて居る者との二つの部類ぶるいが有つて、野原のほらの者は引ひつ越こしに都合ぐあひの好よいテントに住すまひ、谷間たにまの者は石いしとか煉瓦れんがとか固かめた泥どろとか云いふもので築きいた家いへ、又は木きで作つくつた家に住すまふので有あります。

食物じやうじよくには米こめも有ありますが、常食じやうじよくと云いふべきものは麥粉むぎこで有ありまして、之これを食たべるには木きを刮くり抜ぬいて作つくつた浅あい椀わんに入れ水氣みづけを加くへて指先ゆびさきで煉ねるので有あります。ヤツクと云いふ牛うしの様な獸けものの

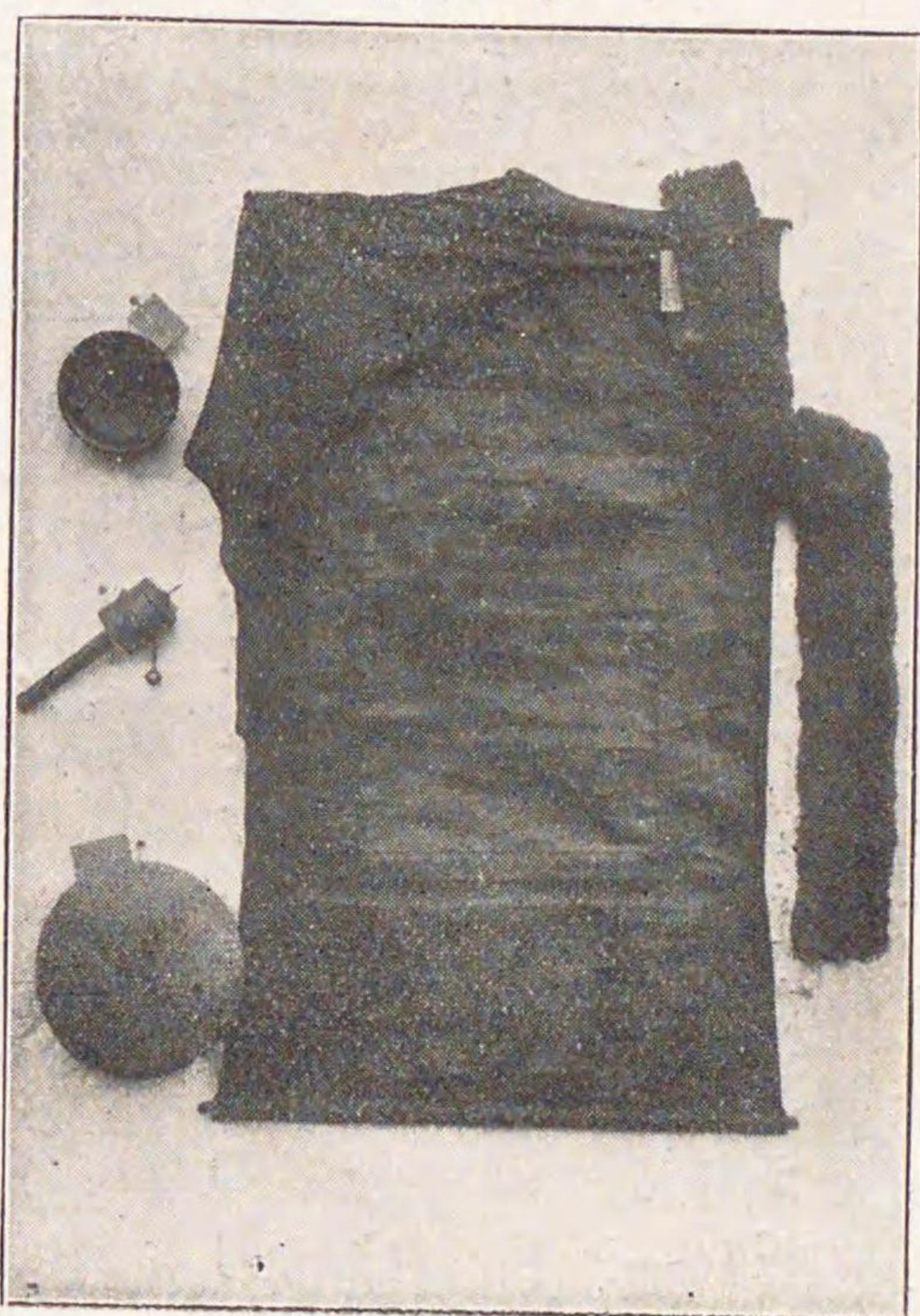
肉にく、牛うしの肉にく、羊ひつじの肉にく、鶏とりの肉にくもチベット人の好このむ所で、子供こどもを育そだてるにも、ヤツクの肉にくを乾ほし固かめ搗つき碎くだいて粉こなとし、之これを獸けものの血ちで溶といて食たべさせる。食物じやうじよくに味あじを付くけるにもヤツクの乳ちゆうで製つくつたバターを用もちゐるので有あります。

7 俗風其と人藏西

日本にっぽんで夫婦ふうふと云いひますと、一人ひとりの男おとこに一人ひとりの女おんなとの間に一いっ緒しょに家いへを持もつたう、一生しやうじゆん苦くるしい事は助たすけ合あはう、樂たのしい事は共ともに樂たのしまうと云いふ約束やくそくが表向おもてむきに出い来たきた時に、此こ男おとこと女おんなとを引ひきくるめて呼よぶ稱なづへで有ありまして、夫をとも一人ひとり妻つまも一人ひとりに極ごくまり切きつて居いる事ことなので有ありますが、チベットではさう極ごくまつて居いりません。一人ひとりの男おとこと一人ひとりの女おんなとが一いっ緒しょに成なる事ことも有ありますが、一人ひとりの男おとこと何人なんにんかの女おんなとが一いっ緒しょに成なつたり、何人なんにんかの男おとこと一人ひとりの女おんなとが一いっ緒しょに成なつ

たり、時とすると何人かの男と何人かの女とが一緒に成つたりする事が有るので有ります。

マラ 宗 の 懸 け 物



襟巻き

木製の椀

廻轉する經筒

笊

信者はどうかにかして澤山讀み度いと色々工夫をし其結果一つの便利な道具が考へ出されたので有ります。それは御經の巻き物

夫れから御經の事に付いて面白い事が有ります。チベットに行はれて居る宗旨で最も盛んなのはラマ宗で有りますが此宗旨では御經を多く讀むのを好いとして有りますので、

の小さいのを薄い金属で拵へた丈の低い罐の様な筒に入れ、心棒を通して、其先きに握り好い柄を付け、全體を振つて鳴らす樂器か何どの様にし、筒の中頃に鎖を付け其端に重もりを添へたもので有ります。先づ此道具の柄を持ち、重もりを振り動かし、勢を付けて廻轉させると筒と共に中の御經が廻る。精神を籠めて斯う云ふ事をするとなれが御經を幾度も幾度も讀んだ事に當たると云ふ譯なのです。尚ほ此他に風車や水車の仕掛けで御經を廻轉させる様にしたのも有ります。斯う云ふ風にして本が讀めたら好いでせうがさううまうは行きません。

最後に敬禮の事を申しませう。日本では頭を下げるのを禮とし、西洋では手を握るのを禮として居ますが、源を探つて見たら夫

れ夫れ據よりどころが有るにもせよ、今日に於ては唯仕來りに従つて人々が
さう心得こころえて居る、夫れが好よさうに思はれて居ると云ふ丈の話し



チベット男子の敬禮をするところ

て居る者でもチベット人に挨拶あいさつされるとちよつと驚くのであり
ます。夫れはどう云ふ仕方かと云ふと、人に向つて舌をペロリと

で是非ともどうしなけ
れば成らぬと云ふ事は
ないのでありますから
異つた土地へ行くと隨
分變はつた敬禮が有る
ものであります。さう
云ふ事を十分に承知し

出すのです。最敬禮となると兩臂りやうひぢを左右に張つて肩かたと同じ高さ
にし、兩手の握り拳こぶしを胸の邊に當て、拇指おやゆびを眞直に上の方に立て
舌を精一杯長く出すので有ります。なんと奇妙な敬禮法では有
りませんか。

此話をお辭儀じぎに代へて此所に句切りくぎりを付け、愈是れから本文に
移る事と致します。

(一) 虎 と 人 其 一

昔ある森に、二匹の虎が三匹の子供と一緒に住んで居た。其父親の虎がだんく年が老つて、今や死なうとする前に、三匹の子供をば自分の膝下に呼集めて、次の様な遺言をしたのであつた。

「お前達も知つて居る通り、虎は森の王と謂はれて居る位の動物である、夫れだから森の中では、自分勝手な振舞をして、なんでも自分の食ひたい生物を殺して食ふ事が出来るが、茲に氣を付けねばならない事は、虎より最と強くつて、又最と賢い動物がある。夫は外でもない、あの人間と謂ふ奴ぢや、俺が今死ぬに當つて、之だけの事を言つて置くから、親の遺言を克く忘れんで、ゆめ人を追つかけ

たり、殺したりしてはなりませぬぞ。」

親虎は子供の行末を氣付う餘り、充分に言ひきかして、其儘息を引き取つてしまつた。

三匹の子虎は、涙ながら親の遺言に耳をそばだて、決して父上の御言葉は忘れませんと誓つた。此三匹の虎の中で、一番兄のものは、柔順でよく親の遺言を守つて、森の中でも鹿や豚の様なものばかりを、捕へては餌食として居つたが、人の影や、少し人の香でもすると、遠く逃げ伸びて決して近寄る様な事はしなかつた。所が一番末の虎は、中々頑固な性質であつたから、だんく年を重ねるに従つて、動ともすると、親の吩咐に背むく様な舉動が見えるのであつた。

或る時、此末の子虎が、獨り心で思ふやう、
 「人間を恐ろしい」と謂ふが、殺す事が出来ない譯がない。それ
 に聞けば、人には、身を守る武器と謂ふものがない。そうぢやが、ど
 うして、此百獸の王と云はれる虎には、勝つ事が出来るものか、
 人の爪や齒の様なものは、全く何の役にも立たない。俺達の力は山
 をも析くと謂ふ位ではないか、かう考へて見ると、人を殺して食へ
 ない譯がどうしてもない。」

かう考へて、此虎は淺はかにも、餌食にする人を探し出さうと思
 つて、母虎や二匹の兄弟の止めるのを耳にも入れないで、遂に或天
 氣のいゝ朝、ソ〜と愈住慣れた杜を後に、出て行つた。

まだ杜から遠くも行かない中に、向うから一匹の年寄つた牡牛

がやつて來たが、まだ虎は今まで牡牛と謂ふものを見た事がない
 ので、何と謂ふ動物やら名さへ知らない、そこで其方へツカ〜と
 近寄つて、

「一體御前は何と謂ふ名の動物だ、まさか人間ぢやあるまいね。」

「え、とんでもない、私は疲れた〜つまらん牡牛です。」

「あ、さうか、俺は今之から人間を探し出して、殺して食はうと思
 ふのだが、一體全體人間と謂ふ奴はどんなものだい。」

「人間ですか、そりや、どうも恐ろしい、不實な動物でさ、お聞きなさ
 い、私は小さい時分から、其人間の奴隷となつて、背中に重い荷物を
 背負つて、實際人間のためにどの位誠實に働いてやつたか、知れま
 せん、勿論私もまだ年が若く、力も強かつた時分には、何かと注意も

し又大事にもして呉れましたが、年が老つて衰へて来て、仕事がだんだん出来ないとなると、實際ミヂメなものぢやありませんか。コレ此通り私を家から追ひ出して、勝手にしろと謂ふ按排ですもの、だから貴君も人間ばかりには手を出さない方が得策ですぜ。之を聞いた虎は、唯せゝら笑つて、又段々歩いて行くと、杜の外れの所に大きい古象が、其鼻で以て草や木の葉を食つて居る。大きい胴體の皮には皺がよつて、小さい眼もどんよりと曇つて、鼻にはここ、かしこに傷跡がある。

虎には、此動物が何だか分らないが、いさゝか吃驚し乍らも其方へ進み寄つて、

「貴君は何と謂ふ獸ですか、マサカあの人間と謂ふ……。」

「如何にも、俺は年を老つた象と謂ふもので人間ではない。」
「さうですか、僕は之から人間を見付け出して殺さうと思ふのです、が人間で謂ふものはどんな奴でしやう。」

「えゝ、貴君は人間を殺すのだつて!! それは止した方がいゝでせう、人と謂ふ奴は兎角不實なものでね、御覽ない、僕は百獸の王とも謂はれる象だが、小さい時から人に馴らされて何年も何年も其奴隸に使はれて居たのです、時には僕の背中へ鞍を置いて荷を積んで、鐵の鞭でビシヤ〜と身體を打つのですもの、實際堪りませんや、若くて強い時分には大事にもされ、食物も毎日腹一杯食べるだけ持つて来て呉れましたが、年を老つて、身體が弱くなると、現金なものでも、見向きもしないで此通りの始末です、人間ばかりは

害を加へるといふ事が起りません。」

子虎は又此象の忠告をも聞かないで、段々進んで行くと、ある森の中で木を切る音がするから、静に其方へ這ひ寄つて行くと、一人の樵夫が今や木を切り倒さうとして居る、虎は暫く其様子を伺つて居たが、到頭藪から跳り出て樵夫の側へツカ〜と行つて、貴君は何と謂ふ動物かと聞くと、

「馬鹿な奴だ、此尊い人様を知らないのか。」

「えッ、こいつは有難い、お前は其人間かえ、俺は朝からその人間を探して殺さうと思つて居た所だ、丁度いふ可哀想だがお前の命は俺が貰つたよ。」

之を聞いた樵夫は意外にもカラ〜と大きな聲で笑つて、

「何だ俺を殺して食ふ!! 馬鹿奴、人間には虎などに殺されて食はれる様な馬鹿者は一人も居ないわい、併し之も慈悲だ、後學のため、御前に見せてやるものがある、サア俺と一緒にそこまで來ないか。」

そこで虎は之も尤もだと思つたのか、其儘人に連れられてたうとう、樵夫の家へやつて來た、その家を見ると大きな太い材木で出來て居る、虎は之を見て、

「一體これは何だ。」

と聞くと、

「之は家と謂ふもので、人間が此家をどうして使ふか、今御前に見せてやらう。」

と言ひ乍ら、身分一人中へ這入つて其儘戸を閉ぢて、家の中から言ふには、

「虎と謂ふものは人に較べては全く馬鹿なものだ、一體御前達のような動物は杜の穴の中に住んで居つて雨には打たれ、風には晒され、暑い時や寒い時には之を防ぐ事が出来ないではないか、如何にも人間は御前達に較べると弱いかも知れないが、併し御前達にはこんな家と謂ふものを作らへる事が出来まい、俺達人間はこんな立派な家を建て、此中に居ると雨が降らうと、風が吹かうとそんな事は一向平氣なものだ。」

之を聞いて虎は、眞赤になつて怒つた。

「何だ、御前達のような弱い奴が、こんな立派な家を持つて居るとは

贅澤すぎる、併し俺達の此美しい皮や、鋭い爪や齒や、それから長い尾は人間の家なんかよりどれ位價値があるか分らないぞ、兎に角すぐ出て来て俺に此家をよこせ。」

「よろしい、やらう。」

と言つて人が戸を開けて表へ出て來ると、入れ代りに虎が中に這入つて、

「どうだ、俺達が住むと家も立派に見えるだらう。」

「ほんとだ、」と言つた儘樵夫は表から錠を下ろして戸を開かぬ様にし、其儘又杜の中へと歸つて來た、馬鹿な虎はうまく人に計られて、唯家の中で餓死するより外はなかつたのである。

(二) 虎と人 其二

暫くすると、虎は家の中に居るのが厭になつたので、表へ飛び出さうとしたが、家が頑丈な作りであるから、中々一寸破して出る所もない、ガツカリして居ると其中に、段々腹が減つて来る、二三日たつてモ一堪らなくなつたから不圖戸の隙間を見付け出して表を見る、と、一匹の小さい鹿が家の側の川で水を飲むで居るから、
 「モシ、鹿さん、全くこの通り頼むからどうか戸を開けて呉れませんか、僕は三日も此中に閉ぢ込められて、今にも餓死しさうなんだから。」

思ひ懸けない虎の聲に一度は吃驚したが、理由が分つて見ると

稍心も落付いて來たので、

「虎さん、とんでもない目に遇ひましたね、併し戸を開けると僕はすぐ食ひ殺されるかも知れないから、まあ眞平だ。」

「いや決してそんな事はしない、充分僕を信じて呉れ玉へ、僕は誓つて君に危害を加へないから。」

鹿も之を聞いて可哀想に思つたから、戸を開けてやると虎は大喜びで表へ出るとすぐ鹿に飛び蒐つて、

「氣の毒だが、俺は腹が減つて仕様がなから、今此處でお前を食ひ殺さう。」

「虎さん、マア御聞きなさい、あれ程さつき貴君が頼むから戸を開けたのでせう、今になつて其約束を反古にするなんて全くソリヤ

聞えませせん、世の中に誠實と謂ふ事があるぢやありませんか。
 「ナニ誠實、誠實とは一體何だ、此世の中にそんなものはあるものかい。」

「えッ此世の中に誠實と謂ふものがありませんて！ ぢやかうしましやう、之から歩いて居る内に出會つた三つの生物について、誠實と謂ふ事があるか、ないかを聞きましやう、三つが三つともないと言へば夫迄です、僕の生命を貴君に心よく差上げましやう、併しあるとすると僕は許して貰ひます事にしやうぢやありませんか。」

「そいつは面白い、賛成してやらう。」

そこで虎と鹿が連れ合つて、少し歩いて行くと路の側に大きい

木があるから鹿が、

「木の叔父さん、一つ御尋ね申したい事があるのですが。」

と言ふと件の木は其生ひ繁つた枝を動かして乍ら徐に答ふるやう、

「御尋ねとは一體何です、私の知つて居る事なれば何でも……。」

「かう言ふ理なのです、さつき僕は此處に居る虎が、杜の中の小屋へ、閉ぢ込められて居たのを見付けました時に、決して僕に害を加へないからと言ふので、戸を開けて上げたのです、所が戸を開けるや否や、虎が僕に飛び蒐つて食ひ殺さうとしますから、あれ程固い約束をして置き乍らと言ふと、虎は今の世の中に誠實なんて謂ふものがないと言ふのです、では今から歩いて出會つた三つの生物に、果して誠實と謂ふものがあるか、ないかと聞いた上、あると言へ

ば許して貰ふし、ないと言へば虎の餌食になると謂ふ事に賭けをしたのです。どうでせう、木の叔父さん、誠實と謂ふものがあるものでせうか、又ないものでせうか。」

「成程御尋ねの譯はよく分りました、そこで鹿さんの御助けをしたいのは山々ですが、正直に私の今までの経験から申しますと、誠實と謂ふものは今の世には決してありません、と謂ふのは、マア御聞きなさい。」と其大きい枝を揺り動かして、

「私は何時でも思ふのですがね、此通り塵や埃を浴びて人や動物に宿る影を與へ、幾人ともなく此道を通る旅人は皆此蔭で烟草を喫つたり、辨當を食つたり、又荷物を積むだ牛や馬を憩はして、さて其次です、散々休むだ上げ句の果は一言の禮も言ふ事か、若々しい枝

を折つて夫を鞭にかへて、牛や馬を無慈悲にぶつたりして行くのでせう、つひぞ一人として私に禮を言つて行くものがありませんと所を見ると、どうやら此世の中に誠實と謂ふものがあるとは申されますまいと思ふのです。」

木の叔父さんの言葉を聞いて、鹿は一方ならず落膽したが、仕方がないから、又虎と一緒に歩いて行く、と向うの牧場に、一匹の牝牛が仔牛と草を食つて居る。見ると親牛は子牛に柔い草をやつて、自分は乾燥無味い枯れた草ばかり食つて居る、何だか美しい慈愛の情が表はれて居る、鹿は虎を連れて其側へ行き、

「牛の叔母さん、私共二人は少し貴君に折入つて、御尋ね致したい事があるのですが。」

すると牛は其柔和しい目を見張つて、暫く見つめて居たが、
 「どんな事か知りませんが御仰有つて御覽なさい。」
 そこで鹿がありし一伍一什の物語をして、さて言ふやう、
 「こんな譯ですが誠實と謂ふものが、虎の言ふ通りないものでせ
 うか。」

牝牛は暫く何か考へて居たが、

「私の今までの經驗によりますと、矢張り虎さんの言ふ事が本當
 ではないかと思はれます、早い話が私と此仔牛とですが、生れ落ち
 ますとすぐ私の乳で育て、漸やく大きくなればこんな野原へ連
 れて来て、旨味さうな草を取つて食はしてやつて居るのでせう、そ
 れがですね、親の恩を何時までも忘れずに居る事か、モ一自分で一

本立ちが出来るとなれば、こんな年老つた親はどうでもいゝと謂
 ふ調子で、親を捨てた儘、一人でどこかへ行つてしまふぢやありま
 せんか、どうして親子の間でさへ之ですもの、今時に誠實なんて、そ
 んな事は全く夢にもありませんよ。」

一度ならず二度ならず、鹿は今全く世の中から、見捨てられた
 様な氣がして、モ一口を利く勇氣さへないが、さりとしてまだ第三の
 生物が何と言ふかも知れない、之が一縷の望みと沈む心を勵まし
 て、また虎と連れだつて歩いて行くと、今度は、兎が向うからやつて
 来たから、鹿が之を呼び止めて、

「兎さん御面倒ですが一寸僕の言ふ事を聞いて下さい。」

「之は珍らしい、鹿さんですか、何か私の手に合ふ事なれば御遠慮

なく……。」

鹿は今度こそと、騒ぐ胸を鎮めつゝ其譯を話して、

「木の叔父さんや、牛の叔母さんも皆、此世の中に誠實と謂ふものが無いと言ふのですが、實際さうなんでしやうか。」

「夫は耳よりな御話です、ね、では鹿さんが其樵夫とかの家へ閉ぢ込められて居たのですか。」

「なに、閉ぢこめられて居たのは此僕なんだ。」
と虎の言ふのを鹿が押し留めて、

「さうぢやないので、今兔さんがどうしてこんな面倒な事が起つたのかと、聞いているのぢやありませんか。」

兔が又語をついで、



虎と兔

「兎に角大分話が複雑して居りますから、三人が一緒に小屋の所まで行つて、よく現場を調べた上で御返事をしませうぢやありませんか。」

との兎の言葉に、鹿と虎は一も二もなく賛成したから息せき切つて、元の小屋の所へ來ると兎は、

「成る程、此家が抑もの起りですね。」

「さうです、僕が此川でかう云ふ風に水を飲むで居たのです。」

「僕は此家の中からかういふ按排に。」と言ひ乍ら、虎は再び家中へ這入つて當時の模様を示すと、

「ハ、ア、さうですか、では戸がかうして閉つて居たのですね。」

と兎は戸を閉ぢて、手早く表から錠を下してしまつた、そして鹿と

兎は身の安全を喜びつゝ、杜の方へと歸つて行つたが、馬鹿な目に遭つたのは虎で、其儘家の中で餓死して終つたと謂ふ事である。

(三) 人食鬼の城

昔或國に王様と女王が住んで居つた、此二方が段々年寄りになつて來るのに、年を老つた後の慰めともなつたり、又王様の位を繼いで呉れる子供がないので、常に之を嘆いて居つた所が此王様が平素から可愛がつて居る牝馬と犬があつたが、どうしたものか此二匹とも子供が生れない、そこで王様は或時、若し王と此馬と犬とに子供を授けて呉れる人があつたなれば望み次第の褒美をやらうと、國中へ布告を出したのであつた。

此布告を見て、大勢の仙人が王宮へ集つて來て、神様に祈禱して、どうか王様始め馬と犬とに子を授ける様にと祈つたが、少しの效驗もなく、其儘落膽の中に三四年を過してしまつた。

ところが此王國の隣の國に一匹の恐ろしい人食鬼が住んで居つた、此人食鬼は色々の魔術を使ふのに妙を得たものであつて、不圖王様が王子を授けて呉れたものには莫大な褒美を出すといて、すぐ様身を仙人に變へて王宮へやつて來て、それから王様に面會を求めたのである。

王様も五六年の間と云ふものは殆ど仙人に愛想をつかして居た様な譯であるから、餘り氣が進まない乍らも、若しやと思つて丁重に遭つて見ると、仙人に化けた人食鬼が、

「恐れ乍ら申上げます、私は小さい時分から深い山に閉ぢ籠つて居つたものですから其内に段々魔法の術を會得しました、聞けば陛下始め、馬と犬とに子供を授けるものを御探しになつて居る御様子なので遙々罷り出でました、屹度私は子供を生まして御目にかけます、併し豫め御断りして置きたいのは陛下には三人の王子を生まれますし、馬も犬も夫々三匹づゝの子供を産みます、尤も其子供は何れも神様がお授け下さつたものですから三年たてば立派に成人致します、そして私は三年目の終りの時に此處に参りまして三人の中で一人の王子と馬と犬との子供を一匹づゝ頂戴して参りますが、夫れでも宜しうございませうか。」

と言ふと王は大きに喜びで早速子供を授けてほしいと言ふと鬼

の化けた仙人は、

「此處に九つの丸薬がありますから之を三個づゝ女王と馬と犬とに飲ますのです、すると三月目に女王は勿論馬も犬も子供を生むで、それから一月置きに一人づゝ生みます。」

と懐の中から小さい丸薬を取出して王に渡した儘、掻消す如く見えなくなつてしまつた、王は其通り女王を始め馬と犬とに三個づゝ飲ますと、案の通り三月目になると不思議にも女王は王子を目出度く生むで、馬にも犬にも一匹づゝ子供が出来たのであつた。

而已ならず一月置きに子供が出来て、仙人の言つた通りとなつた。

三年たつと其子供は何れも充分生長したが、之で三年目の終りと謂ふ日に仙人に化けた人食鬼が王宮へやつて来て、一人づゝ都

合三つの子供を貰ひたいと、前にした約束を言ひ出したから、王さまは女王と相談して一番末の子供をやる事にきめた、そこで仙人は犬と馬の末の子をも一緒に連れて自分の國へと歸つてしまつた。

王子は仙人に化けた人食鬼に連れられて遠くまで來ると高い山の上へ來た、其時鬼は谷の底にある大きい城を指して、
「あそこに見えて居るのは俺の城であるが、お前は之から此谷底を下りて行つて、城の外側にある庭へ行くと山羊が木の幹へ繫いである、その又少し離れた所に藁束が置いてあるから、其藁を山羊に食はしてやるのだ、それが濟めば今度は畑へ行くと澤山な鶏が飼つてあるから、其隅にある壺の中から米を取り出して食はして

來るのだ、お前の今日やる事は之丈けだが、夕方になつて俺が行くまで決して城の中へ這入つてはいけなないぞ。」
と王子に吩咐けて其儘どこかへ行つてしまつた。

そこで年がまだ若い王子は、伴れて來た馬の子に乗つて犬を連れて、谷間に下り人食鬼の城へ來て見ると、如何にも門へ行く道の兩側には庭と畑がある、先づ庭へ這入つて行くと大きい一本の木に山羊を繫いで、其側に藁の束がどつさり積むであるから、其一把を山羊にやると、サア大變だ、藁を山羊の前の地面の上に置くと、大きい猛々しい狼になつて、瞬く内に山羊を食ひ殺して山の方へ逃げて行つてしまつた、王子はこんな不思議な事を見たのは初めてであるから、吃驚したが、根が氣猛な性質であるから、次に畑に行く

と澤山な鶏がある、其側に大きい壺があつて、其中に米が一杯になつて居る、王子は此壺の中から米を一掴み掴み出して鶏に蒔いてやると米が地に落ちると又不思議や夫が三匹の山猫になつて、鶏を片つばしから食ひ殺して山の方へと逃げて行つてしまつた。

こんな事を見た王子の心は誠に面白くなつて好奇心が湧て來た、元來勇敢い性質であるから、鬼の言つた言葉も今は全く忘れてしまつて、戸を開いて城の中に這入つて其數多い室の中を一々見廻つて居たが唯美しいのと、よく掃除が行き届いて居るだけで別に何事も起らなかつたが、不圖奥まつた室へ這入つて見ると美しい、若い女が其耳の後へ花を置いてスヤ〜と寝ひつて居る、王子はこんな不思議な所で人間に遭つたのであるから何となく

なつかしい様な氣がした。そこで其側によつて起さうとしたが、どうしても起きないから、仕方なしに其耳の後ろにある花を持つて其所を出やうとすると、美人は始めて目を醒まして、眠い目を手でこすり乍ら寢臺の上へ坐つた、すると側に王子が居るのに氣がついたと見えて、どうして貴君はこんな所へ來たのかと聞くから王子は此城に住むで居る仙人の不思議な術によつて生れた事から、此處に來た事まで悉しく話すと、何を思つたか美人は俄かに氣色を變へて云ふには、

「貴君が仙人だと思つて居るのは恐ろしい人食ひ鬼なのです、人を殺しては心臓をえぐり取り、今まで殺した人の數は幾百千に上るか分りません、併しあの人食鬼は犠牲となつた人間が其咄附け

られた事をよく守つて居る時には、どうしても其人間を食ふ事が出来ないので、それです。それから人間を捕へて来ると、屹度難題を云つて、初めは割合にやさしいが、夫が日に増しむづかしくなつて来て、到頭人間を其言ふ通り出来なくする様に仕向けるのです。此家の後ろにある大きな建物の所へ行くと分りますが、それは殺された人が山ほどあります。貴君も今日から其難題をかけられて居るので、どうやら今日だけの事は立派におやりなされた様ですが、今に鬼が歸つて来ると、もつとむづかしい事を言ひ出すに違ひありません。」と美人は話して、尙續けて云ふには、

「妾として初めから此處に居るものではないのです。實は或る國の王の娘でありますが、丁度貴君が御遭ひになつた境遇と同じ様な

事で此人食鬼の手に渡りまして、此處へ連れられて来ましたが、どうしたのでしやう、鬼は妾を食べやうとはしないで御覽の通り恐ろしい人食鬼の妻となり果てたのであります。所が此鬼は非常な嫉妬家ですから、毎日出て行く時には、妾の耳の後ろに魔法を使ふ花を置いて妾を眠らして行くのです。屹度留守の内に逃げてもすまいかと心配になるのでしやう、それです。それから此花が耳の所から取り去られない中は、どうしても目を醒す事が出来ないので、王子は此物語りに一向耳を澄して居つたが、此鬼の妖術に陥らず、進んで悪鬼を退治てやらうとまで固く決心して居る王子の事です。それから鬼の習慣などについて悉しく聞かしてほしいと頼むと、王女は答へて云ふには、

「さうですね、あの鬼は人とは違つて魔法を使ふのですから、人食鬼を退治しやうと謂ふのは餘程むづかしい事だと思ひます、だつて其首を斬つた所で、其魂をとつてしまはないとすぐに生き歸るのですもの、尤も其魂は非常に秘密にかくして居つて、恐らく其隠して居る所を知つて居るのは鬼の外に妾位のものでしやう、何れ近い内に其場所を御話し致しますが、夫よりも先に申上げたいのはどうすれば鬼を退治する事が出来るかと謂ふのです、御承知でもありましやうが、人間が鬼を退治しやうとする時には鬼が向ふを向いて居る時ではないと駄目なのです、所が此鬼はこんな事は萬事抜目なく知つて居りますから、決して人間に背中を向けると謂ふ事はありません、ですから今晚鬼が歸つて来て、貴君が云ひつ

かつた二つの事をやつてしまつて居るのを見ると、今度は臺所眞中にある大きい暖爐の周圍を三度廻れと言ふに極つて居りますから、貴君が其通りしますと、其後から鬼がついて来て、貴君が鬼に背中を向けて居る間に、貴君を殺さうとするに相違ありません、それで此呟附けがあつた時に夫の通りしなくてはいけません、併し、こんな暗い所では道が分りませんから、案内をして下さいと云ひなさい、すると鬼は屹度其通りにしますから、鬼の後ろについて行く間に、好い機會があれば退治するのですが、丁度機會がなく、且呟附けられた事をやりとげれば、今晚は別に難題を持ちかけますまい、妾は翌日のやらせる事をよく聞いて置いて、明朝鬼の居らない留守に御話致しませう。

王女の親切に王子は深く喜びで、厚く禮を述べると王女は再び言葉をついで、

「もう、おつつけ鬼が歸つて来る時分ですから、私は前の様に寢臺の上に横になつて居りますから花を元の様に置いて下さいませ。妾は眠つて居りますから貴君は庭へ出て鬼の歸つて来るのを待つて入らつしやい、決して城の中へ這入つた事を見付かつてはいけませんよ。」

と固く言ひふくめ、王子が其耳の後ろへ花を置くと其儘死むだ様に眠つてしまつた。そこで王子は呟附けられた通り庭へ出て鬼の来るのを待つて居ると、暫くして例の人食鬼が仙人に化けて王子の前へ来て、さて荒々しい聲で云ふには、

「よつき呟附けて置いた事を皆やつてしまつたか。」

と聞くので王子は叮嚀に、

「いかにも仰有つた通りやりました。」

と答へた、すると鬼は王子を臺所へ連れて来て、其真中にある大きい煖爐を指し乍ら、

「お前はあの煖爐の周圍を三度走り廻れ。」

「承知しました、併しこんな真暗では道が分りませんからどうぞ貴君が先きになつて案内して下さい。」

鬼は心の中で不平で堪らないが、仕方がないから自分が先きにたつて煖爐の周圍を廻り初めたから王子は成るべく鬼の後ろへ近寄つて行かうと思つたが、其走りの早い事と謂つたらさながら

電光石火の様で、王子は隙もあらば鬼を退治しようと手によく切れる短刀をかくして居つたが、どうしても機会がない、此仕事は済むと鬼は何も言はないで王子を此暗い臺所の中へ閉ぢ込めた儘、二階へと上つて行つた。

王子は其夜は此暗い臺所で夜を明して、翌朝になると鬼は自分の用事に出掛けて行つたから、王子は此所を走り出で王女の居る室へと急いで行くと、矢張り昨日の通り寝て居るから、耳の後ろに置いてある魔の花を取り去ると、すぐ元の通り目を醒ました。

「お早やうございます、昨夕は聞く事が出来ましたか、どうか又教へて頂きたいものです。」

「え、聞きました、今晚鬼が歸つて来ると、鬼は廣い應接室で貴君

に三度御辭儀をなさいと言ふのだそうです、何れ貴君が御辭儀をして居る間に殺さうと思つて居るのでせう、勿論呟通しなくにはいけません、かう御言ひなさい、私は王子ですから、今迄人に御辭儀をした事がないから、どうしていゝのだから知りません、だから其仕方を教へて下さいと云ふのです、さうすれば決して鬼は厭だと言ふ事が出来ませんから、鬼が御辭儀の真似をして居る内に隙を見て首を斬つておしまひなさい、其時にはまた私は鬼を全く殺してしまふ方法を教へてあげましやう。」

そこで王子はインとして再び魔の花を王女の耳の後ろへ置いて其眠つてしまふのを見て庭へ出て、鬼の歸つて来るのを待つて居つた、かくて夕方になると鬼は歸つて来て王女が言つた通

り、王子を應接室に連れて来て、自分は正面の椅子に腰をかけて、王子に三度、俺に禮拜しろと申付けた。そこで王子は、
 「承知致しました、併し私は王子と生れてからまだ人に御辭儀をした事がありませんから、どうして御辭儀するのか一向知りません、それで先づ其仕方から教へて下さい。」
 と鬼に言ふと、鬼は何かブツ／＼口の中で言つて居たが、仕方がないから王子を自分の椅子に腰をかけさせて、自分は疊の上へ手をついて三度禮拜をしました。王子は此處どとばかりに心を勵まし、鬼が初めて頭を下げた時に懐の中で短刀の鞘を拂ひ、二度目に頭を下げた時に手でしかと短刀を握り、三度目の御辭儀をした時に、骨も砕けよとばかり打ち下ろすと、果敢なくも鬼の首は前に斬り

落されてしまつた。そこで王子はすぐ様王女の所へ行つて息せき乍ら、魔の花を取つて目を醒まさせ、夫れから大略の話をすると、
 「よくやりましたね、マア之で一段落はつきまりましたが、前にも言つた通り、鬼を殺すには其靈魂をも殺してしまはなければなりませんから、かうなさい、貴君は此の下にある穴倉の中へ行つて九ツの眞暗りな室を通つて行くと突き當りに一枚の石で出来た、壁がありませぬ、其時貴君は其刀の背中で三度其壁を軽く打つので、其打つ毎に「開け」と言葉をかけるのです、すると三度目には壁が開いて、其中の室に這入る事が出来ませぬ、其地下の室の中には手に美しい結晶した水の這入つた瓶を持つた可愛らしい子供が居るに相違ありません、其子供はツマリ鬼の魂で之があるために、鬼が生き

て居られるのですから、貴君はすぐに此子供を殺して、その手に持つて居る瓶を私の所へ持つて入らつしやい、其瓶の中にある結晶した水の一滴は總て今まで殺した人間の魂ですから、滴さない様にしないといけません。」

王子は之を聞くと、飛ぶが如くに城の下にある穴倉の中へ這入つて、眞暗がりの室を九ツだけ通つて行くと、一枚の石から出來た壁があるから、王女に教へられた通り刀の背中で三度石の壁を打つて、「開け」と言ふと三度目に何かガタといふ音が聞えたと思ふと人が這入れる位の穴が明いた。

そこで王子は二足三足中へ這入つて行くと、二つの室があつて、小さい蠟燭が一ツ點してある。其眞中に、結晶した水の這入つた

瓶をさげた可愛い子供が坐つて居るから立どころに之を切り殺し、伴の瓶を持つて勇むで王女の所へ來ると、

「妾もこんな嬉しい事はありません、之で鬼は二度と生きつこはありません、ですから之から二人で今まで鬼に殺された人を生かしてやりましやう、さあ此瓶を持って妾と一緒に入らつしやい。」

と王女は先きに立つて案内して、幾つとも數へ切れない位澤山な段階子や、長い廊下を通つて來ると、丁度城の後へ出ました、王女はとある戸を開くと細長くて、何だか薄暗い室がある、窓と謂つてもたつた一つであるから陰氣な薄暗い室である、這入つて行くと流石の王子も驚いた、眞中にある細い道の兩側には幾百千人とも知らない位の死んだ身體がズラリと並んで居る、何れも心臓をえぐ

り取られて殺されたものだが、身體には疵一ツついて居らない、何れもチャンと着物を着た儘だ、此時王女は王子に言ふやう、

「此處にある死屍は皆あの鬼のために殺された人ばかりで、其心臓をえぐり取つて、魂は此通り結晶して水になつて居るのです、だから貴君は此死屍へ一々此結晶水を注いでおやりなさい、さうすれば皆生き返りますから。」

そこで王子は呟附けられた通り此澤山の死屍に、一々の件の靈水を注いでやると、見る／＼間に今まで死んで居た人が「ウム」と言つて目をパチリと開いて御互に話をしたり、其邊を歩く様になつた、暫くすると之をやつと仕遂げたから、蘇き返つた人は厚く王子と王女に禮を述べて夫々自分の家へと歸つて行つた、そこで王

子は王女に分れをつげ、鬼の城をそつくり王女に渡して、一緒に來た馬に乗つて、犬と無事に元の國へと歸つて來て種々の人から王子の勇ましい功を賞たてられたのであつた。

(四) 裂けた唇の兎

或日の事、一匹の兎が道を歩いて居つて、とある曲り角を通つて居ると、不意に大きな虎に出遇つた。虎は兎を見るやよき獲物ぞと兎に向つて、

「今直ぐお前を食つてしまふからさう思へ。」

と言ふと、兎は飛び上る程吃驚して、

「どうぞ、虎の叔父さん、食べるのだけは許して下さい、私はこんな

小さなものですもの、食べた所で腹一杯になるものではありませ
ん、其代り生命を助けて貰つたお禮には、もつと大きい食物のある
處へ案内しますから。」

と手を合して虎に頼み込んだ。

「ナニ、お前よりも大きな食物のある處へ案内行くと、ぢや許すと
しやう、併し嘘を吐くと承知せんぞ。」

夫れから虎は、兎を案内に立て、とぼくと道を歩き出した。

さうかうする間に、日はずつぷりと暮れて、鼻を摘まれても分ら
なくなつた。すると兎は何と思つたか、頻りに何か食物を旨味さ
うに食つて居る様であるから、虎は不思議さうに、
「オイ、兎さん、お前は一體何を食つて居るのだ。」

と聞くと、

「腹が減つて堪りませんから、自分の眼を抉り出して食つて居る
のです、中々旨味いものですよ、夫に暫くたつと又元の通りの目が
チャンと出来るんですもの。」

之を聞いた虎は一時は大變吃驚はしたが、さて自分も随分腹が
減つて仕様がなから、到頭其一つの眼を食つてしまつた、そこで
腹も少しは大きくなつたから、又ソロソロ道を歩き出すと兎は又
何か食つて居る様子なので、

「兎さん、何か食ふものがあるか、あれば俺にも少し呉れ。」

「ナニ、食ふものなんぞあるものですか、腹が減つて仕方がありま
せんから、もう一つの眼を食つて居るのです、前よりも一層旨味いで

すな。」

馬鹿な虎は之を聞いて欺されるとは知らないで、又外の眼をも食つてしまつて、とうとう盲目になつてしまつた。之を見た兎は、めたと心に思つて、盲目の虎を高い崖の上へ連れて来て、

「虎の叔父さん、何だかゾクゾク寒いぢやありませんか、火でも焚いて暖りましやう。」

「それがいゝぢや、火を焚かう。」

そこで兎は、虎が坐つて居る前へ、どつさりと薪を積むで之に火をつけて、段々其燃えて居る薪を虎の前へ近寄せて行くと、虎は目が見えないが熱いので、段々後退りして崖の縁へ來たが、終に虎は可哀想に深さ幾千仞とも知れない溪の中へ落ち込んでしまつた。

併し幸か不幸か、其壁を立てた様な絶崖に、大きい木が生えて居たので、今は九死一生の場合、其齒で以て確と大きい枝を食へたのであつた。之を見た兎は如何にも驚いた様子で、手を打ち乍ら、

「おや、まア虎の叔父さん、怪我はありませんでしたか。」

と聞くと、虎は口を開くと眞逆まに谷底へ落ちてしまふから、唯かすかに「ウツ……」と唸つて居るだけであつた。

「だつて虎の叔父さんが、大怪我をせないかと心配で堪りませくから、どうか私を安心させると思つてた。」
 「大丈夫」と言つて下さい」と言ふと、虎も成程と思つたか、自分の危いのも忘れて「大丈夫」と聲を出して口を開いたから堪らない、身は木を離れて、崖の谷へと落ち込んで、其儘とうとう死んでしまつた。

其翌朝になつて、兎は、又道を歩いて居ると、今度は向うから二匹の馬を引張つた馬士がやつて來た。

「叔父さん、御早やう、時にいゝ虎の皮のある處を教へて上げましやうか。」

「あゝ、兎さんですか、どうか教へて下さい。」

と慾に目のない男と見えて、虎の皮で一儲けしやうと思つたか、馬も何も其場へ捨てゝ、兎の教へて呉れた谷間をさして馳けて行つた、馬士が見えなくなつた時に、兎は丁度頭の上の木に、止つて居る二匹の鳥を見付け出して、

「鳥さん、まア随分、ぼんやりして居ますね、こゝにはほら二匹の馬があつて、誰も番人が居ないでせう、兎のゐない間に洗濯とやら謂ひ

ますから、あの馬の背中にある腫物を、食つておやりなさいよ。」

兎に教へられた鳥は、成程と思つて、すぐ様馬の背中へ飛び下りて其大きい嘴で、腫物をつゝき出した、すると馬は何だか背中が、急に痛くなつて來たので、ピン〜と跳ね出して、驀進に馳出した。

兎は手を打つて喜むだが、又何か悪戯をしてやらうと思つて、ブラ〜歩いて行くと、折から子供が澤山の羊を引きつれてやつて來た。

「お早やう、一寸ね、鳥の卵の、どつさりある所を、教へて上げましやうか。」

「うん、どこに其卵があるのだい、俺は夫を取つて來るんだ。」

子供は、兎から鳥の巢のある所を聞いて、夫から羊の番を兎に頼

ひで、木のある所を目蒐けて馳け出した。

兎は四邊を見廻すと、程近い山の麓に狼の居るのを見付けたから、ツカ〜と其方へ行つて、

「狼さん、あすこに誰も番をして居らない羊の群が居るがどうです、二三匹食物にしては。」

之を聞いた狼は、返事もせず、羊の群を目蒐けて飛び込ひで行くと、羊は大變だと思つて四方八方へ逃げ出した。狼は其中で一番旨味さうな奴を二三匹、恐ろしい齒をひき出しては、片つばしから殺して居る。其間に兎は四周の光景が一瞬の下に集る高い山の上へ登つて見ると、あちらの谷の底では、一人の男が死ひだ虎の皮を剥いて居るのやら、鳥に背中の腫物をつゝかせ乍ら其邊を狂

氣の様に飛び廻つて居る馬や、又そこには、子供が鳥の巢から卵を盗み出して其留守に大事の羊が、狼に食はれて居る様な事がありありと見えるのである。兎はもう面白くて〜堪らないから、ただもう天下を我物の様に心得て、大きな石の上へ腰をかけては、大口開いてカラ〜と笑つたので、兎の口があので通り裂けたのだと謂ふ話である。

(五) 金持ちと貧乏人

昔或る村に二軒の並んだ家があつて、其一つには金持ちが住ひ、外の方には貧乏人が住ひで居つた。金持ちの男は名をツエリンと謂つて、何かと云ふと自分の財産を鼻にかけて、性質もまことに

殘忍な方であつたが、チャムバと謂ふ貧乏人の方は親切で、あるものは人に施してやると謂ふ風な人であつた。

或時の事、二羽の雀が貧乏人の家の這入口の上へ、巢を作つて、間もなく、小さな雛鳥が生れた。併し、まだ飛ぶ事が出来ないから親鳥が食物を探しに行つて居た時に、どうした機會か、一羽の雛が巢から戸口の所へ落ちて、足を挫いてしまつた。之を間もなく貧乏人の男が見付けて、其挫いた足をよく絲で縛つてやつて、元の通り巢の中へ入れてやつた。

貧乏人はこんな事は、少しも氣になかつたが、此助けられた雀は、決して前に受けた恩を忘れなかつた。それで自分で飛べる様になると、或日の事、其巢から飛び出して、口一杯に、何か種子を啣へ

て来て、夫を貧乏人が坐つて居た机の上に置いて、

「此種子は以前受けた御恩の御禮です、兎に角どんなものが出来るか、蒔いて置いて御覽なさいまし。」

と言つた儘又何處かへ、飛び去つてしまつた。

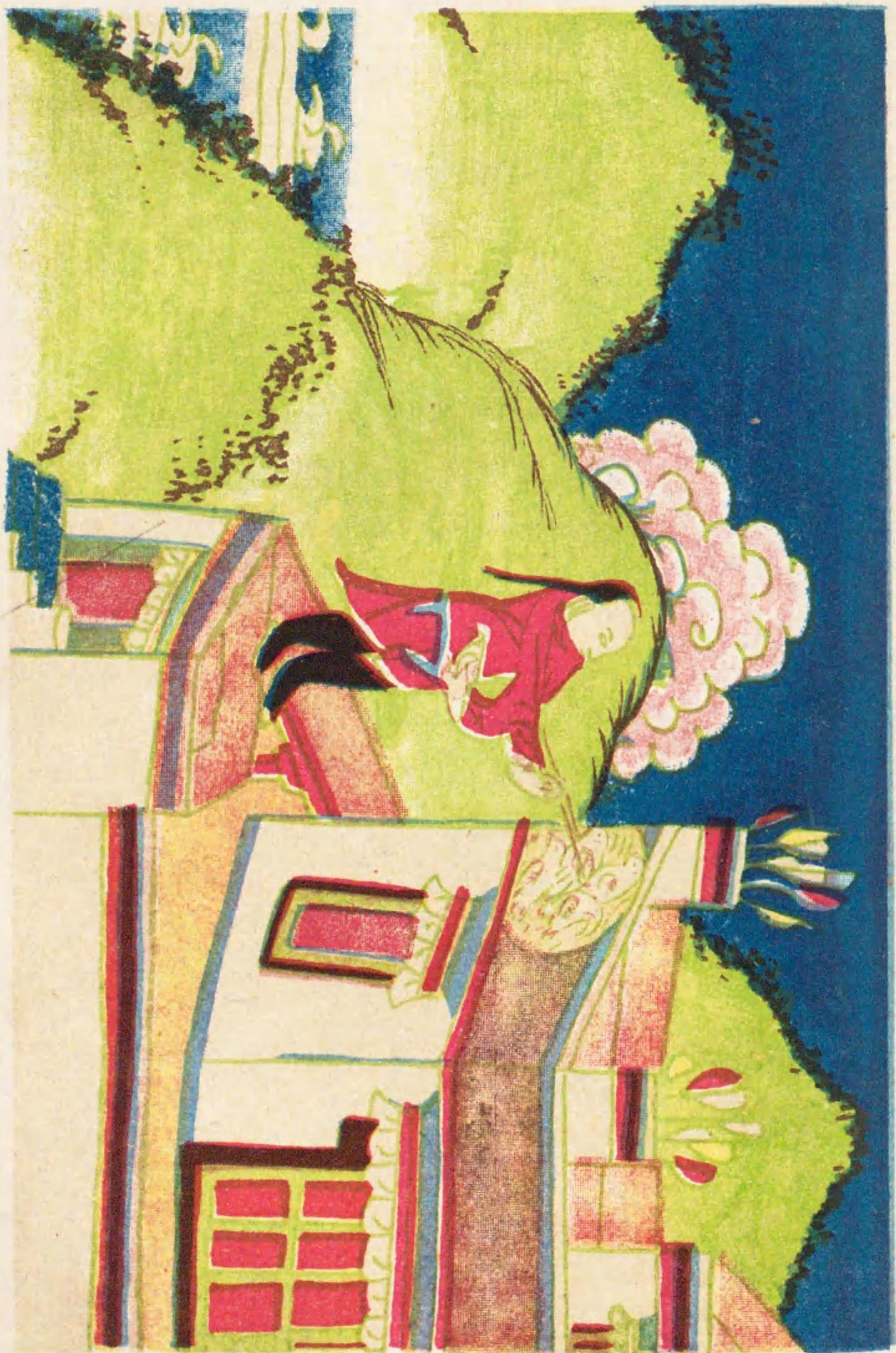
チャムバは雀の話聞いて、少々怪しんだが、獨り心に思ふやう、「こんな種子を呉れたつて、別に大した贈物でもなからうが、雀として前の恩を忘れないと謂ふのは、實に見上げたものだ、兎に角物は試した、蒔いて置いて見やう。」

そこでチャムバは、家の前へ夫を蒔いたが、其中にスツカリ忘れて仕舞つた。

一と月とたち、二月とたつと、まへにまいて置いた種子から芽が

生えて、すぐ大きくなつて来たが、或日の事不圖木の枝を見ると不思議や生つて居る果實は皆貴い寶玉であつた。チャムバは之を見て大に喜んで早速其寶石を取集めて程近き町に運むでは、其を賣つて、急に大金持ちとなつたのである。

チャムバの急に金持ちになつたのを見て、驚いたのは隣りのツエリンであつた。どうも不思議で堪らないから或日の事、チャムバの所へお酒の御土産をもつて来て、近隣の誼を求め、口實で、自ら酒を酌み乍ら、夫となく金持ちになつた譯を聞いた。するとチャムバは人を疑ふと謂ふ事のない男であるから、ありし次第を話してやると、ツエリンは尙四方山の世間話をして歸つて行つた、心の中ではどうかしてチャムバの様な利益を取りたいものだと思



慈深が窟の子を取ら

へて居つた。

所が間もなく、ツエ、リンの家の家根へも、一羽の雀が巢を作つて雛を産むだから、之ぞ天の賜物と、態々家根へ登つて行つて雀の巢を探して、箸で其雛をつまみ出し乍ら地の上に之を落してやると、可哀想に雀は足を挫いてしまつた、そこでツエ、リンは、チャムバから聞いた通り絲でよく足を縛つてやつて、例の慾張根性を現はして、決して受けた恩は忘れるものぢやないぞとよく言ひ聞かして、また元の通り巢の中へ入れて置いた。

其雀が段々大きくなつた或日の事、案の通り雀が家の中に飛び込むで来て、くはへて来た種子を机の上へ置いて、

「以前は色々と御世話様になりました、御禮のしるしまでに、何が

生えて来ますか、之を庭へ蒔いて置いて御覧なさい。」

金持ちの男は之を聞いて大に喜ぶで、もうすぐ隣りの人の様にえらい金持ちになれると思つて居つた。そこで丁寧ていねいに庭へ蒔く所を作らへて之に澤山な肥料をやつて、毎日庭へ行つてはもう生えないかしらと、短かい首を長くして待つて居つた。

その内に芽が出て来ると、瞬またく間に大きくなつた。或朝の事である、庭へ出て、きつと果實くだものの代りに寶石いしが一杯生つて居るものと思つてよく見ると、こは如何いかに寶石どころか、庭の真中まんなかに恐ろしい大きな悪者の様な面構おもてがまへをしたお化けが、小わきに紙の束たばを一杯かかへ込むで立つて居る、之を見たツエ、リンは吃驚びっくりしたが、恐るゝ誰方どなたですかと尋ねると、此お化けが、

「俺は前の世に於いてお前に金を貸したものだ、その貸した金はどの位だか知れないが、今夫を取返しに来たのだ。」

と言つてお化けは、ツエ、リンの家から家畜かき、それから住つて居る土地やら其他凡ての財産を引たくつて、丸裸まるはだかの素寒貧すかんびんにして仕舞つた、尙其上にツエ、リンを自分の奴隸どれいとしてしまつたのである。

夫から三四箇月たつと、俄かに金持ちになつたチャムバは旅行りょこうに出發しゅつぱつする事となつた、それでお金を一杯入れた袋ふくろをツエ、リンに歸つて来るまで預つて置いて呉れと頼たのむで、其儘旅行に出してしまつた、所がお金の這入はいつた大きい袋を預つたツエ、リンは、其日の食べる事にも追はれて居ると謂ふ、只今の境遇きやうぐうであるから、ツイ一日と二日とたつ内に、少しづつ、費つかひ出して、暫くの間あひだに全く費つかひ盡し

てしまつた。併し之を自分が爲たと思はれるのが厭だから、お金の代りに袋へ砂をつめて置いて、知らぬ顔の半兵衛をきめこんだ。流石に悪い事の露顯を恐れて、恐々ながらチャムバの歸つて来るのを待つて居つた。

夫から二三日たつと、チャムバは旅行から歸て來た。そこでツエリンの所へ行つて、以前に預けて置たお金の袋を聞くと、ツエリンは何食はぬ顔して、袋を取出してチャムバに渡した。開けて見ると、お金どころか、砂が一杯這入居るので、チャムバはあつと驚いて、「之は一體どうしたのでせう、私は貴君にお金の袋を預けて置いた筈だつたに、之は砂ぢやありませんか。」

かう言はれて見ると、流石の悪い奴も何と答へていゝか分らな

ら、やつと重い口を開いて、

「それは大變な事をしました、併し何時の間にかお金がこんな砂に變つてしまつたのです。」

之を聞いたチャムバは、別に何とも小言を言はないで、其儘件の袋をさげて家へ歸つて來た。

其儘に時は暫く過ぎてから、チャムバは小さい子供達のために、月謝の入らない學校を建て、生徒を教ふることにした。月謝がないと聞いてツエリンは、そんな結構な學校なら、自分の子供も是非入れてやりたいと謂ふので、早速その學校へ入學さして、間もなく、ツエリンは、近所の村まで二三日行つて來なければならぬ用が起つたので、自分の子供をチャムバに預けて出掛けて行つた。

そこでチャムバは何と思つたか、一匹の馴れた猿を買つて来て、次の言葉を教へ込むだ。

「お父さん、僕はこんなものになつてしまつた、どうしましやう。」
その中にツエ、リンは歸つて来たから、自分の息子がどうなつて居るか、まづ學校へ行つて見ると、チャムバは一段高い所へ昇つて、一生懸命に教へて居る、ツエ、リンは四邊を見廻すと、自分の子供はどこにも居らないで、一匹の猿が生徒の中に交つて腰掛けの上すわに坐つて居るから、

「私の子供はどこに居りませうか。」
とチャムバに聞くと、無言の儘、件の猿を捉へて、夫をツエ、リンの顔先へつきつけた。



たしまりかたのもふんこは私んやち父お

「之は一體どう謂ふ理由なのでせう。之は猿ぢやありませんか、貴君に御頼みした私の子供はどこに……？」

すると猿は、

「お父さん、僕はこんなものになつてしまひました、どうしましやう。」

之を聞いたツエ、リンは大に立腹して、今にもチャムバに跳りかからうとしたが、さてつらく考へて見ると、何事も身から出た錆、自分の息子を取り返さうとするには、先に自分が使つてしまつたお金の袋を返さなければならぬと、始めて悟つたのであつた。

(六) 山羊と狼と狐と兎との話

或日の事、一匹の狼が大層腹が減つて、仕様がなから何か食物がないかと、ある山の山腹に遙つて居ると、生れてからまだ一年とたゝない位の小山羊を見付け出した、狼は此奴はいゝものがあると思つて、見つかからぬ様に近づいて今や跳りかゝつて食ひつかうとすると、始めて夫と悟つた山羊は吃驚して、

「狼さん、貴君は今私を食はうとするが、やつと烈しい冬を越しただけで身體が瘠せて居ます、それです、だからこの秋まで待てば身體に脂肪もついて今の倍位になります、それから其時食つて下さい。」

「ウム、さうか、それぢや、かうしやう、お前が今から六箇月の後に再び此處で俺に遭ふと謂ふ事にして置かう。」

かう言つて置いて、狼は又外の食物を探しに出掛けた。

夫から六箇月たつて世は再び秋になると、狼は約束通りに前の場所に出掛けて行くと、其途中で遭つたのは狐であつた。

「狼さん、どちらへ？」

「俺が山羊と約束した事があるから、其處へ行つて約束通り彼奴を食つてしまふのだ。」

「それは御樂しみですね、併し山羊はあの通り大きい獣ですから、一人では兎ても食ひ切れませんでしやう、私に少し殘物でも貰へませんか。」

「それぢや、仕方がない俺と一緒に來い。」

狼と狐が連れだつて行くと、今度は兎が向ふからやつて來た。

「おや、狼さんと狐さんとお揃ひで何處へ御出掛けです？」

「お、兎さんか、外でもないが今日は山羊を食ふと云ふ約束の日で、此狐が残物でもいゝから呉れと言ふから連れて来た譯なのさ。」
 「さうですか、あの山羊と謂ふ奴はあの通り大きい獣ですもの、如何に狼さんでも一人では食ひきれませんよ、どうです僕の様なおんな小さいものにはホンの少しで宜しいのですから、チト御招伴を願はれますまいか。」

「あゝ、いゝとも一緒に行かう。」

三匹が打ち連れて、約束の場所へ来て見ると、早や大きな山羊が待つて居る、春から夏へかけて草を澤山食つたと見えて、體は眞圓いほど肥つて居つた。

「山羊さん、どうも御待ちどほ、實は此處に居る狐と兎が矢張りお

前の肉を食ひたいと言つたから連れて来たのだ、氣の毒だが之から食ひ始めるぞ。」

と言つて、狼は其儘山羊に飛びかゝつて將に喉頭首を噛み切らうとする、兎は側から、

「一寸、狼さん、折角殺すのなら、喉頭を噛むと血が澤山出て美味くないから、絞殺した方がいゝぢやありませんか、喉頭を絞めれば血が少しも出ませんよ。」

狼は如何にも尤もだと思つたので、

「絞め殺すと謂ふと、どうすればいゝのだ。」

「それは譯はないでさ、ホラ、あそこに羊番の小屋がありませう、あそこへ行つて綱を借りて来て、其を輪にして首の所へあて、力任

せに三人で曳けばすぐ殺せます。」
 それではさうしやうと謂ふので狐はすぐ走つて行つて綱を取つて來た。

「私は始め一寸方法をやつて見ましやう。」

と言つて綱を持つて其一方の端へ一ツの大きい輪を、今一ツの端へは小さい二ツの輪を作らへて、

「此大きい輪へは山羊の頭を入れるのですが、御覽の通り大きな奴ですから三人揃つて力任せに曳かないと、とても絞め殺せません、だから此方の小さい輪へ狼さんと狐さんが首を入れて、私は此端を持つて居りますから、私が相圖すると力一杯曳くのです、なんと分りましたか。」

狼と狐とは、いかにも兎は賢い奴だと、頻に感服して居る、三匹は手を合せて先づ大きい輪を山羊の首へかけて、次に狼と狐とが他の端の小さい輪の中へ夫々首を突込む、だから、兎は其端を齒で啣へて、
 「さあ用意はい、ですか。」

「さ、よ。」

「それぢや、力任せに曳くのだよ。」

と之を合圖に何れも力一杯曳くと山羊の頸が絞まるどころか、却て狼と狐の首が絞められさうだから、狼は、

「おい、狐もつと強く引かないか、俺は首が絞まる位曳いてるのだぜ。」

狐は稍不安を感じて來た、此奴は兎にうまく計られたのではな

いかと心配しながら、

「俺も首が絞まる位曳つ張つてるのだ。」
すると兎は、

「狼さんも狐さんもつとしつかり引くのだ、すると今に御前達の首が絞るから。」
と言つて口に啣へて居た綱の端を放すと、忽ち狼と狐とは白い眼をひき出してピン／＼跳ねて到頭死んだが、山羊の首にある輪は絞める様になつて居らなかつたから、山羊は輪から抜けて出て、兎と山羊は笑ひ乍ら自分達の巢へ歸つて來たのであつた。

(七) 馬鹿な回々教徒

昔し、ある町の外れに一人の若い回々教徒が、お母さんと一緒に見すばらしい小屋に住んで居つた。段々此若い男が年を重ねて來ると、元來内氣な性質で、そして少し馬鹿であるから、始終何かしらん難儀が出來て來て、自分で自分の身を苦しめて居るのであつた。又近所の子供達は面白半分、此馬鹿者にからかつて、つまらない戲談計り聞かしてやつては喜んで居つた。

或日、此馬鹿な男が野原へ出て見ると、其邊一面に黄い花が美しく咲いて居るから、其真中へ胡坐をかいて、一生懸命に花を摘むで居ると、不圖其側を通つた同じ村の若者が夫を見て、こいつは一つあの大馬鹿にからかつてやらうと思つて、

「お前は一體其處で何をして居るのだ、ホラ見て見る、お前の足の

所にどつさり黄い花があるだらう、夫はお前が今すぐ死ぬと謂ふ表示なんだ。」

とおどしつけると、之を眞に受けた馬鹿者は、吃驚して、これは大變だ、併し死ぬとすれば今から墓の用意をしなければならぬと、獨り心に考へて、今度は柔い土地に穴を掘つて、自分はその中に這入つて、今死ぬか〜と、死の來るのを待つて居つた。

それから又暫くすると其國の王の召使が、大きい陶器の油壺を擔いで此野原を通ると、大きい男が穴の中に這入つて、目をつぶつて居るから、どうしたのだと聞くと、實はかう〜謂ふ譯で、もう死ぬだらう〜と思つて、かうして待つて居ると謂ふ始末を話すと、件の召使は可笑しくつて堪らない。

「お前は何と謂ふ馬鹿者だらう、そんな事があるものか、さあ、俺と一緒に、此油壺を王様の所まで持つて來い、そうすれば汝にお禮として鶏を一羽呉れてやらう。」

之を聞いた馬鹿者は大に喜んで、早速墓から飛び出し、油壺を背中に背負つて、それから召使に伴れられて王宮をさして行つた。

馬鹿者は、召使が鶏をやると言つたのが嬉しくて堪らない、そこで獨り心に思ふには、

「鶏を貰へばすぐに卵を産むだらう、俺は其卵を孵化して雛が生れると、夫を賣つて牝牛を買ふのだ、すると牝牛は又子を産むに違ひないから、其子が大きくなつた時に又其を賣飛ばして、今度は其金で立派な家を建てるのだ、そして俺は嫁さんを貰ふ、子供が出來

て大きくなると習字や讀書を自分で教へてやつて、俺の言ふ事をよく聞いて賢い子供であつたら大事にしてやるし、馬鹿な奴だと蹴つたり踏むんだりしてやらうし。

道すがらこんな途方もない事を考へて、蹴つたり踏むんだりしてやらうと謂ふ所まで來ると、興に乗じてツイ馬鹿者は劇しく地團太を踏むと、其拍子に背中に負つて居た油壺が落ちて、粉微塵に碎けてしまつた、之を見た召使は怒るまい事か、眞赤になつて、どうして地團太を踏むで、こんな事をしたのだと、きびしく尋ねると、馬鹿者はたゞブル／＼顛へ乍ら、かう／＼謂ふ譯だと答へたが、夫では召使が承知しない、力づくで馬鹿者を引きずつて王宮へと連れて來た。それから恐る／＼王様の前に出て、實はこの馬鹿者がかう

謂ふ次第で油壺を碎してしまひましたと王様に申上げた、王様は馬鹿者に向つてどう謂ふ譯でそんな事をしたと尋ねられた。すると馬鹿者は、墓の中へ這入つて死ぬのを待つて居た事から、鶏をやらうと謂ふ事を話して、

「鶏を貰つて雛を孵化し、夫を賣拂つて牝牛を買つて、牝牛が子を生むで大きくなれば、又其を金に代へて家を建て、嫁さんを貰ひ、子供が出來て賢い奴であると大事にしてやるが馬鹿な子であると、踏んだり蹴つたりしてやる積りで、ツイ何も忘れてしまつて其眞似をして見たのでした。」

と答へると王様は大に笑つて、馬鹿者に金貸を一個やつて自分の家へと歸らしたのであつた。

馬鹿者は王様から貰つた金貨を大事に持つて、自分の家へ歸つて来たが其前まで来ると、一匹の野良犬が今しも自分の内から財布を啣へ出して逃げやうとして居るので、吃驚して早速其ことを母に告げると、お母さんが思ふには、「こんな事を近所の人達に知らしては、却つてあの犬を逃し、自分達で追つかけてその財布を盗むでしまふかも知れない、さうだ、かうしやう。」と考へて、戸棚の中から砂糖を持ち出して夫を馬鹿な息子に知らさず、屋根の上へ置くと、屋根からバラ／＼と砂糖が落ちて来た。そこで母親は息子に云ふには、

「まあ、太郎や、早く此處へお出で、屋根から砂糖が降つて来るぢやないかえ。」

と言ふと馬鹿息子は早や犬の事も忘れて仕舞つて、其處へ来て見ると、成程砂糖が屋根から落ちて来るから、之はうまいと一生懸命に両手に受けては夫を甜めて居つた、其間にお母さんは表へ出て犬の啣へて居た財布を取り戻して来た。

この事があつてから暫くの後、馬鹿者のお母さんが、村から一里距つた所に住んで居る或金持の人を招待した事があつた、其時其金持ちが馬鹿息子を見て、馬鹿とは一向知らないで、自分の娘の婿に呉れと言ひ出した。之を聞いた母親は、大に喜びで早速承知して、土地の風習として、愈馬鹿息子は、花嫁の家の家族となる事となつた。そこで一切萬端の準備を整へると、花嫁の家から馬に乗つた人々が、花婿を迎へにやつて来たから、馬鹿息子は一番い、

着物を着て、先づ迎への使者の人達を一番上等の座敷へ案内して酒や御馳走を饗した後、母親に分れを告げ、自ら使者の一同の先導に立つて馬を進めて行つた。

其内に日が暮れて、真圓いお月さまが西の山に現れて来ると、四邊は皎々として宛ら白晝の如くであつた、すると馬鹿な奴は仕方のないもので、不圖地面の上を見ると自分と同じ様な黒い影法師がついて来るので、あつた、馬鹿息子は之を見て大に驚いて、此奴は必定幽霊かお化けに違ひない、屹度自分を食はうと思つて来たのだと、愚にもつかぬ事を考へ出して、恐しさの餘り馬に一鞭あて、一目散に逃げ出した、併しいくら早く走つても矢張り同じ様に影がついて来る、此奴は彌々大變だと云ふので、懐にかくして居つた



徒教々回たれ恐を影の分自

短刀を影法師目がけて投げつけたが、矢張り同じ様に黒い影がついて来て去らない、今度は頭から着物をかぶつて、恐るゝ見て見ると、今度は地上の影まで頭から何か、かぶさつて居る、かうなつて来ると、もう恐くて、仕様がなから、到頭馬から飛び下りて、裸足で道の側にある大きい松の木の蔭へ逃げ込むで来た。

木の蔭ではつと一息ついて見ると、最早や、さつきまで連いて来た影法師は居らないから、ヤツト胸をなで下ろしたが、一寸でも木の蔭をふみ出すと、また真黒い影がついて来る、そこで馬鹿息子は此處に居るのが一番安全だと考へて、松の木へ攀ぢ上つて、知らず識らずのうちに眠つてしまつた。

こゝで一寸話が變つて、ある旅人の一隊があつて、それが矢張り

馬鹿息子の来た方から歩いて来たのであつたが不圖見ると道の上には立派な着物や色々のものが落ちて居つて、其處から少し離れた所に馬も居るから、件の旅人等は夫を拾つて馬と諸共馬鹿者が寝て居る木の下へ来て、其拾つたものを分配し始めた。

此時丁度目を醒した馬鹿息子は、下を見ると大勢の人間が自分の捨てたものを分配して居る様子であるから、こいつは堪らむと、木の上から大聲を上げて、「俺にも夫を分けて呉れい。」と怒鳴た、旅人は不意を食つて吃驚して、これはつきり木の上に住むで居る幽霊に違ひないと思つたので、馬は勿論分配しかけて居た色々のものも夫處へ投げ捨てた儘後をも見ずに逃げ出した、之を見た馬鹿者は木から下りて来て、再び自分の衣服を着てから馬に乗つ

てそれから花嫁の家をさして駆け出した。

花嫁の家につくと、其兩親は花嫁の御出でだと謂ふので、恭しく玄關まで出迎へ、どうしてこんなに遅くなりましたかと聞き乍ら、兼て設けたる室へと案内した、早や室の中には近隣の人々や、知己が今日を晴れと着飾つて、花嫁の到着や遅しと待つて居つたのであつた。

元來此花嫁は、馬鹿者ではあるが、ごく親切な氣のいゝ男で、また常々から親孝行であつたから、自分が御馳走になつて居る間にでも、お母さんの好きさうなものをあれ、これと考へて、食卓の上にあつた口の小さい銅の器をそつと膝の下へかくして、人に知れない様に、お母さんの好みさうなものをとつては、夫に入れて居つた所

が一寸した不注意で、其隠した器の中へ右の手を押し込むでしまつて、どうしても抜けないので、御馳走を食べる事が出来ない、仕方がないから少しも食はずに居ると花嫁の両親は、モットお上りなさいと頻りに郁める。大馬鹿な花嫁も腹は大變減つて居るのではあるが、右の手が此始末であるから、モウ澤山ですと言つては食はないで居つた。

其内に夜も更けて來ると、宴會もすみ、客も皆歸つて今は室の中には只花嫁と花婿とが居るだけであつた、すると花嫁は先程から花婿の様子が如何にも變なので其理由を聞くと、初めの内は花婿さんも何だか極りが悪くつて、いゝ加減な事斗りを言つて居たが、やう／＼心を思ひ定めて、實は右の手が器の中へ這入つて、どうし

ても抜けないと、初めて理由を話すと、

「そんな事ですか、それなら何も心配はないぢやありませんか、あのね、階子段の所に大きい白い石がありますから、夫へたゞきつけると、すぐ器が碎れますから、手がわけなくぬけますよ。」

馬鹿な花婿は、成程之は尤もだと思つて人の知れない様に、階子段の下の所へ行くと、如何にも白いものがあるから、夫を目蒐けて力任せに打ちつけると、白いものは急に「キヤッ」と叫び出した、流石の馬鹿息子も大に驚いて、よく側へ寄つて見て見ると、石だと思つたのは花嫁の親父の白髪頭で、あまり酒を飲むものだから酔つばらつて、其處で前後も知らずに寝て居つたのであつた。

馬鹿の花婿は大に驚いた、之はてつきり親父を殺したに違ひな

いと思つたので、すぐ之から逃げ出さうと思つて、静に戸を開けて暗夜に紛れて何處とも知れず逃げ出した、どしどしと足に任して道を駈け出したが、とある百姓家までやつて來ると、其家の庭の隅に大きい蜜蜂の巢がある、なんにも知らない馬鹿者は、蜜蜂なんて少しも知らないから、其儘此蜜蜂の箱の中へ這入つて、蜜を甜り乍ら寝てしまつた、夜半になると寒くて仕様がなから、箱の中を這ひ出して、直ぐ側にある羊の毛の物置きの中へ這ひ込むで、其の中へもぐり込むで、其儘寝てしまつた。

眼を醒ますと夜はほのくくと明け放れて居るが、自分の身體を見ると羊の毛で眞白になつて居るから、之は養父を殺した罰で羊になつたものだ、と馬鹿は馬鹿だけの考を起して、其儘すぐ庭の隅

に居た羊の群に這入つて、其日は終日羊の中へ交り、羊の眞似をして、晩になつてから羊が寝る檻の中へ這入つて居つた。

其夜半の事、數人の泥棒が檻の中へ這入つて來て、澤山の羊の中から一番脂肪の多い、重い奴を盗まうと、一々提げて見ると馬鹿者の羊が一番重いから、盜賊は夫を羊と思つて何處ともなく引つ擔いで、ある川の堤に連れて來た。それから其羊を地上に投げ出して、今や將に短刀で羊の喉頭を裂かうとするので、之は大變だと、

「泥棒さん、どうか私の命だけは助けて下さい。」

と羊が口を利たので、泥棒は吃驚して、ソリヤ羊のお化けだと謂ふので、雲を霞と逃げて仕舞つた、それで生命は助かつたものゝ、さて自分の身體は綿の様に疲れて居るから、仕方がなしに覺悟をさめ

て又花嫁の所へ舞ひ戻つて来た、見ると養父の負傷は重いが、生命には別條がないので、ありし次第を物語ると、養父も別段小言を言はないで、其儘に濟まして呉れたのであつた。

それから別は何事も起らなくて、一家睦じく暮して居たが、馬鹿婿は少し何か商賣をして金儲けをしやうと思つて、澤山な品物を仕入れて、多くの利益を得る積で印度へ出掛けて行つた、其の行く道で或日の事、大きい宿屋へ泊つた、すると其家の女主人は厚く馬鹿婿を待遇して、晩食が濟むとお化けの事やら、途方途轍もない馬鹿げた話で持ち切つた。併し如何に馬鹿者でも信じられぬ位の話もあつたから、そんな事は逆も信じられないと言ふと、

「それぢや今に、話よりもつと思議なものを御目に掛けませう、

夜が更けて来ると、猫に提灯を持たしてよこしますからね、妾の言ふ事が本當か、嘘か賭をしましやうぢやありませんか。」

「それは面白い、猫がもし提灯を持つて来ましたら、貴女の欲しいものをなんでも上げましやう。」

「それぢやかうしましやう、妾の言つた事が本當でなかつた時は、此家から家財、すつかり貴君に御渡ししましやう、併し妾が勝ちましたらば、貴君の持つて居らるゝものを残らず頂戴しますよ。」

元來此宿屋の女主人は、常にこの賭事をしては喜むで居たもので、夫れには丁度よく馴れた猫があつて晩になると、座敷へ提灯をもつて来る様に仕込むのである、今までこんな計あるとは知らない旅人は、此手を食つて丸裸にせられ、それで今は此宿屋は

莫大の富を積むで居るのである。

愈日が暮れてしまふと、女主人の言つた通り、大きい白猫が火をともした提灯を啣へて座敷へ這入つて來た、マサカと思つて居た此馬鹿者も仕方がない、到頭持つて居つたものを皆巻き上げられてしまつて、今更どうする事も出來ない、其儘奴隸として召使はれて居つた。

一方では、此馬鹿者の妻君の方で、夫が出た儘一と月二た月とたつても歸つて來ないから心配で堪らない。到頭男の装をして二三匹の小馬に、羊の毛を積んで、商人に扮装し、夫の跡を追つて道を辿つて行つた。間もなく、ある村へついて大きい旅宿へつくと、其庭の所に自分の夫が一生懸命に働いて居るので、始めて事の次第

が分つて來た、併し外の者には此事を秘密にして、何食はぬ顔で店の中に這入つて、一夜の宿を求めたのであつた。

夕方になると女主人が出て來て、色々話をして居る内に、ソロソロ又例の不思議な話を持ち出して來たので、

「それは又面白い話ですね、併し妾にはそんな提灯を持つて來る猫があるとは思へませんが、兎に角今晚はよく考へた上で賭け事は明朝の事に致しませう。」

其夜は事なく過ぎて、明るる日になると女主人に、

「昨夕からよく考へましたが、どうしてもそんな事があるとは思へませんから仰有る通り今晚猫が提灯を持つて來るか、來ないか賭けをしましやう。」

と、そこで夫がやつた時と、同じ様な條件で賭け事をする約束をして、其事をそつと夫に知らして置いて、それからかうくする様にと、チャンと計を定めて日の暮れるのを待つて居つた。其間に夫は呟附けられた通り、三匹の鼠を小さい箱の中へ入れて、之を其着物の下に隠して置いた、夜になると主人と女の客とが晚餐の卓に着いて、猫が提灯を持つて来るか来ないかを見て居つた。又召使になつた夫は丁度其室の入口の所から少し離れた隅に身を潜めて猫や来るかと片づをのんで待つて居つた。

丁度日がづつぶり暮れると、猫が口に提灯を啣へて其室の入口の所へ来たから、待ち構へて居た召使の夫は、箱の中から一匹の鼠を逃がしてやつた、喜びで逃げて行く鼠を見付け出した猫は、猛然

と身構へをして、正に鼠に跳り掛らむとする氣勢を示した、如何によく馴れた猫でも其性質には勝てない、口に啣へて居つた提灯の事は全く忘れてしまつて居るらしい、初めの鼠が逃げて行つたのを見計らつて、夫は又第二の鼠を猫の前へ放つと、愈猫が其本性を現はして来たから、更に第三番目の鼠を今度は猫の鼻の先さへつきつける位にしたので、モウ猫も堪らない、提灯を其場へほうり出した儘鼠の後を追つかけて、到頭其巢の所で捕へてしまつた。

主人と女の客は、日が全く暮れ果て、しまつても、猫が提灯を持つて来ないから、愈主人の負と極つて、其一切の財産を譲らなければならぬ事になつた。そこで二人の夫婦は大きい富を得て故郷へ歸つて来て、楽しく世を送つたそうである。

(八) 猫 と 鼠

昔し、大きい百姓家に一匹の猫が住むで居つたが、此百姓家には随分澤山の鼠が居るのであつた。初の間は此猫も鼠が澤山居るから、捕つては食ひ、食つては捕へして、食物にはちつとも不自由をせず、極く幸福に生活をして居つたが、段々猫も歳を老るに従つて、さう思ふ様には鼠が取れない、其日の食物にも不自由すると謂ふ始末になつたから、これではならぬと心に確と思案をきめ込むで、或日の事、決して害を加へないからと約束をして鼠を残らず自分の所へ呼び集めて、さて言ふには、

「皆さんを此處へお呼びしましたのは外でもありませんが少し

御話申したい事があつたからです、實は私も段々年を老つて來まして、今まで通りの事は到底出來ませんから、今後は斷然と前の悪い事を悔い改めましたから、決して皆さんには、危害を加へないつもりです、ですから皆さんも之から安心して勝手な振舞が出来る譯です、併し唯皆さんに望みたいのは一日に二度づゝ行列をして私の居る前を通つて下さいませんか、それから此私の改心に對して皆さんの満足を表はすために、私の前を通る時には必らず皆んな御辭儀をして行つて貰ひたいですが、

猫の改心を聞いた澤山の鼠は、もう之から恐ろしい敵は居なくなつたのだと謂ふ譯で大喜び、早速猫の言うた事に賛成して、夫れでは毎日二度づゝ其通り致しませうと謂ふ事に一決したのであ

つた。

其日の夕方になると、猫は室の隅にある小高い腰掛の上へ座を占めて居ると、愈鼠の行列は御辭儀をし乍ら猫の前を通る事となつた。不埒なる猫は計が當つたと心の中で窃に喜むで、何食はぬ顔して其行列を通過さして、其間に外のものには知れない様に、一番行列の最後にある鼠を捕へて食つて、かくの如くして先づ一日に二度づゝ旨味い食物にありつく事が出来て、少しも働かないで無事に日を送つて居たのであつた。

所が此鼠の中にラムベ、アンベと謂ふ、二匹の極く仲のいゝ友達があつて、二匹共外の鼠に較べては中々賢い性であつた、そこで此二匹は何時とはなしに鼠の數の減つて行くのを見て、不思議に思

つて、あれ位猫が約束したのだが、こいつは中々油斷が出来ないと、二匹はひそ／＼相談して、將來の事に就いて考へて居たのであつたが、遂に之から行列の時には何時でもラムベは行列の真先きにたつて、アンベは其最後に居る事に極めてそして行列が通過して居る間には、ラムベとアンベとが互に呼びかはして居ると謂ふ風にした、そこで翌日の夕方行列が猫の前を通るときラムベは最先頭に立ち、アンベは最後に居つて、ラムベが例の老猫が坐つて居る前を通るとき、

「アンベさん、居るかえ。」

と聞くと後の方からは、

「あゝ、此處に居るよ。」

と聲をかけた。

こんな風に行列が通り過ぎるまで、たえず互に呼びかはして居つたから、猫はどうしても鼠を捕へる事が出来なかつた。

弱つたのは猫で、其晩は鼠を食はないから、腹が減つて仕様がな
い、夜通し何か外に旨味い計畫がないものかと考へて居つたが、さ
つきの行列の時鼠を食へなかつたのは、偶然前と後とに二人の友
達の鼠が居たから、計畫が駄目となつたのだ、次の行列の時には、ま
さか、あの鼠共が前と後とには居るまい、待てよ、待てよと空腹をか
かへて待つて居つたが、朝になると、鼠の行列が通つたが、昨夜と同
じ様に其行列の前後には二匹の友達の鼠が居て、行列が通り過ぎ
るまで互に聲をかけ合うて居るから、どうしても鼠を捕へる事が

出来ない。併し今晚はと、一縷の望を繋いで、空腹を抱へて夕方に
なるのを待つて居つた。

一方鼠の方では、ラムベ、アムベの二匹は皆によく猫に氣をつけ
て、一寸でもその様子が怪しく見えたら、すぐ逃げるのだぞと言ひ
聞して置いて、又定刻になつて行列が通り始めると、先頭に立つた
ラムベが、

「アンベさん、居るかい。」

と聲をかける、すると後の方から、

「此處に居るよ。」

と答へた。

かうなると、猫はもう辛抱が出来ない、到頭堪らなくなつて鼠の

行列めがけて飛び込むと、兼て猫の舉動に注意して居た鼠共は、「ソレツ」とばかりに逸早く逃げ出して、室の中には影も形も見えなくなつた。

この事があつて以來と云ふものは、鼠はもう一切猫を信用しない、到頭猫は餓死をとげ、ランベ、アンベは皆の鼠を救つて大功あるものとして永く崇められたと謂ふ事である。

(九) 蛙 と 鳥

鳥が一匹の蛙を嘴にくはへて、之を食はうとして其近所の屋根の上へ止ると口に啣へて居た蛙が急に笑ひ始めたから、「蛙さん、一體何が可笑しいのだい。」



蛙を啄むとすゝる

「いえ、何でもありませんが、實は此屋根に私の親蛙が住んで居て、夫がまた馬鹿に強いものですから、私に危害を加へるものには屹度復讐をして呉れるのです。」

譯を聞いて鳥も餘りいゝ氣持がしない、こんな所には長居は無用と思つて、他の屋根に飛び移り、此處なら大丈夫と謂ふ譯で蛙を食はうとすると又、蛙が笑ひ出した。

「蛙さん、何故笑つて居るのだ。」

「私ですか、何だか可笑しくて仕様がありませんや、併し理由はかうなんです、此家に住んで居る人は私の叔父に當るもので、其強い事は兎ても私の父どころの騒ぎではありません、だから私に一寸でも悪戯する奴があつてもすぐ捉へて仇をうつて呉れます。」

鳥は愈驚いた、此奴は屋根の上は危険で仕様がなれと思つて今度は野原にある井戸の縁に近く下りて、今度こそはと思つて蛙を食はうとする、蛙は、

「鳥さん、冗談ぢやありません、そんな扁つたい嘴では如何に食はれる身だつて、痛くて仕様がありません、だから其處にある石で嘴を研いで下さい。」

鳥も其れは尤もだと思つたから、石の方を向いて一生懸命に嘴を研ぎ始めた、蛙は其隙を的つて鳥に知れない様に、井戸の中へ飛び込んでしまつた。

間もなく鳥は嘴を研いで之なればいゝだらうと思つて井戸の側へ來ると蛙が居らない、そこで四邊を探しても一向見えないか

ら不圖井戸の中を窺いて見ると、蛙が水の中から首を出して笑つて居る。

「蛙さん、さあ嘴はうまく研げたから出て來なさい、さつきから、どこへ行つたのかと思つて頻りに探して居たのだ。」

「そうですか、それは御苦勞様、併し此通りの深い井戸ですから兎ても出る事は出来ません、だから私を食へたければ貴君が自分で此處まで來ればいゝでしやう。」
と言つて其儘井戸の底へ深く沈んでしまつた。

(一〇) 鼠と其三匹の子

昔子バルと謂ふ國の王宮の程近くに夫婦の鼠が巢を作つて住

むで居つた。

雌めすの鼠ねずみが妊娠みもちをした時に、雄おすの鼠ねずみが強い子こが生れる様にと神様へ御願ねがひをした、すると月満つきみちて子供こどもは生れたが其子供こどもは不思議ふしぎや虎とらの子こであつた、其内に虎とらの子こが大きくなつた時に、

「お母かあさん、私は之から藪やぶの中へ行つて兄弟あにの虎とらと一緒に住すむで居いりますが、何か不時ふじの事が出来て私わたしの力がいります時には、どこでも手近てぢかにある藪やぶの所へ行つて私の毛けを手てに掴つかむで空そらに投なげて、三度私わたしの名なを御呼おひなされ、すると私は屹度きつと助けに参まりますから。」と言いひ置いて、自分の毛けを手てに一杯渡わたして其儘森もりの方かたへ行いつてしまつた。

それから又暫しばしくすると雌鼠めねずみが妊娠みもちをしたから、今度は神様へ美

しい子を御授おまげ下さいと御願ねがすると、生れたのは孔雀くわんせうであつた、その孔雀くわんせうの子こが大きくなつた時に、

「お母かあさん、私は之から杜もりへ行つて兄弟あにと一緒に住すみたいのです、が、若もし用もちがあるときには、その山の上へ上つて私の羽はねを空そらに投なげて三度私わたしの名なを呼よんで下さい、すると私はどこに居をつてもすぐ参まりますから。」

と自分の羽はねを手てへ一杯残のこして、其儘杜もりへ行つてしまつた。

三度目に又鼠ねずみが妊娠みもちをしたから、今度は賢かしこくて強い金持かねもちの子こを御授おまげ下さいと神様に御頼ねがみすると、丁度生れたのは人間にんげんの子こであつた、併ひし其子供こどもが段々だんだん大きくなると又もや前の二人ふたりの子こと同じ様に人間にんげんの社しゃ會かいへ這入まつて住すみたがるに違ちがひないと思つた

ので、或日母親が二人の兄の事を聞かしてやつて、お前が大きくなつても人間の社會へは行かないで、何時までもお母さんの側に御出でよと、よく云つて聞かしてやると子供は母親の言ふ通り決して人間社會へは足を踏み入れませんと誓つて、毎日〱巢の所で遊んで居つた。

話が變つて此國に、散髪屋をやつて人の爪を掃除する一人の回教徒があつた、此散髪屋は中々其仕事が上手であつたから常に王様の御用をつとめて居つた、する或日の事、王宮へ行かうと思つて鼠の巢の前を通ると子供が一人坐つて居るから、

「どうだ、髪を刈て爪を掃除してはしくはないか。」と言ふと子供は「して欲しい。」と言ふので早速散髪を始めるとさあ、大變刈つ

た子供の毛髪が地の上へ落ちると、夫が皆金剛石や種々の寶石となつて来る、散髪屋はまことに驚いて、又爪を切つてやると夫が地の上へ落ちると見る間に、藍寶石に變つて居るのである。

面のあたり此不思議を見た散髪屋は大に驚いて、早速王宮へ行つて王様に之を申上げると、元來此王様は大の慾張りものであるから、その子供を欲しくて仕様がな、早速使はして其子供を王宮へ引つ張つて來た、子供が恐る〱王の前へ出ると、王は、

「お前は我王國の法度を犯した不届至極の奴であるから其罪としてお前の母を殺して、お前を俺の奴隸として、使ふから左様心得えい、併し、お前が今直ぐ四匹の大きい虎を出して來て我王宮の四方の門を守る様にすれば其褒美としてお前達母子の命は救ふて

やつて其上俺の娘の婿として此王國を譲り渡さう。」

此難題に子供は泣くく家へ歸つて、お母さんに其事を話すと、案外にお母さんは平氣で、

「夫は譯のないこと、さういふ事なら今から直ぐお前は此虎の毛を以て、近所の藪へ行き、空へ其毛を投げて三度兄さんの虎の名をお呼びなさい、屹度助けて呉れるから。」

と虎の毛を渡して呉れたから、母に呟けられた通り近所のよく繁つた藪へ行つて、虎の毛を空に投げて三度其名を呼ぶと不思議や遠くの藪の中から低い唸り聲が聞えたかと思ふと早や大きい虎が目の前へ現れて、

「僕はお前の兄だが、何か急用でも出来たのか。」

と聞くから子供は王様の難題を詳しく話して、

「その呟け通りしないとお母さんを殺して、僕を奴隸にすると謂ふのです、どうしたらいゝでしやう。」

すると虎は大口開いてカラ／＼と笑つて、

「唯それだけか、四匹は愚か、百匹の虎でも立所に集めて見せる。」

と虎は物凄い吼え聲を出す、其側にある藪の中へ一杯になる位澤山の虎が四方八方から集つて来たから、兄の虎は弟の子供を其背中にのせ、澤山の虎が其後に従つて王宮さして進むで来た。

虎の者共が段々王宮の近くへ来ると、王宮では、さあ、大變だ、虎が攻めて来たと謂ふ譯で護衛兵には武装を命じ、其旨を王に通じると、王も大に驚いたが兎に角仕様がなから子供と虎の一行を王

宮へ通せと謂ふ命令を下した。

すると小供は兄の虎の背中に跨り乍ら何十とも知れない虎を
引き連れて悠々と王の膝下に至つて云ふには、

「御注文の通り、澤山の虎を連れて來ましたから、其中でよかりさ
うな四匹を御選み下さい。」

王は今更前の言葉を打消す事も出来ないから、其中で一番美し
い四匹を選び出して外の虎は皆森へ歸らしたが、さて慾深い王は
どうしても髪の毛や爪が寶石になる子供の事を忘れられないの
で、其から二三日たつて再び子供を前に呼び寄せて、今度は、王宮の
屋根にある四つの金の塔の上へ孔雀を獲つて來て置かなければ
其母親を殺して、お前を奴隸にすると命令を發した。

可哀相に子供は又難題が湧き上つたと落膽し乍ら母親の所へ
來て其事を話すと、母親は夫は譯ない事だ、之を山の上へ持つて行
つて、空に投げてから三度其名を呼ぶと孔雀が必らず出て來るか
らと言つて孔雀の羽毛を手一杯子供にやつた。

そこで子供は呟咐かつた通り高い山の頂に行つて、其羽根を空
に投げて三度其名を呼ぶと、直ぐに羽ばたきする音が聞えたと思
ふと其側にある大きい木の枝に美しい孔雀が止つて居る。

「私はお前の兄の孔雀だが何か用事でもあるのかい。」
と言ふから子供は王様から申付かつた難題を話すると、

「そうか、そんな事は何でもなし。」
と孔雀はすぐ様、高い木の上に止つて二聲三聲、高く鳴くと、見る見

る内に四方から澤山の孔雀が飛んで来て、空に一杯になつた。

兄の孔雀は子供を其足で掴むで、幾百とも知れない孔雀の群が王宮さして飛んで行くと、之を見た朝廷の人々は、かくと王に告げると、王は宮殿の正面に座を占めて其到着を待つて居つた、間もなく子供は後ろに孔雀の一行を引き連れて王の前に進んで、

「唯今杜の中から之だけ孔雀を連れて來ましたから、此中で御望みになるのを四匹御取り下さい。」

王は又大に驚いたが、其中から四匹だけ選んで、残りのものを杜へと返してしまつた。

併しまだ王は子供に未練を残して居る、二三日たつと又子供を呼び出して今度は、お前の母が俺の象と素手で闘つて、それに勝て

ばよし、負ければ母を殺して夫れからお前を奴隸にしてしまふと申聞かした。

一度ならず、二度ならず、か様な難題に、逆もお母さんの様な小鼠が王の大きい象と喧嘩しては勝てる筈がない、とんだ事になつたものだと心配し乍ら歸つて其事をお母さんに話すと、お母さんは一向平氣で驚かない、早速自分の體に毒を塗つて、其尾には長い絲を結びつけた、さあ之でいゝと子供には其計を授けて、子供の袂の中へ這入つて王宮へやつて來た。

王宮では早や準備が出來て、正面には王座を設け、四邊には當日の光景を見物しやうと幾百人とも知れない人々が寄集まつて居る、一方を見ると早や王の象が足にまだ鎖をはめた儘敵の來るの

を待つて居る、其處へ子供がやつて来て、吼え、猛れる象の面前に身を構へたのであつた。戦闘開始の太鼓がドン／＼鳴つて象の鎖が解かれると、怒號一聲、象は子供を見蒐けて突進して来た。そこで子供は象が近づいて来た時に袂の中から母親の鼠を取り出すと、流石の象も其面前の地上を走り廻る鼠の餘り小さいのにおきれて居ると、鼠はすばやく象の足を傳つて鼻の尖から、その孔の中へゴソ／＼と這ひ込むで頭の中まで進むで来た。すると象は頭の痛さが烈しくなるので、暴威は益其度を加へて柵の中を狂氣の如く馳け廻つて居る、其間に頭の中へ這入つた鼠は腦の中を走り廻つて、身體につけた毒を蒔き散らすと、流石の大きな象も毒薬に遭つては叶はない、すぐ其場に倒れて到頭死むでしまつたから、子供は鼠

の尾につけた糸を引くと、夫に導れて母親の鼠が象の身體を離れて飛び出して来た。

王様も此處に至つては最早や前に言つた約束を守らないと謂ふ譯には行かない、そこで其娘を子供に娶し、王國の半分を分けてやつたが間もなく王が死むたので、子供は全王國を領し、其母親と樂しく世を送つたと云ふ事である。

(一〇) 三人の泥棒

昔支那に賢い三人の泥棒があつた、此三人の泥棒は性來賢い上へさして、夫々外の人が真似る事の出来ない奇術を心得て居るのであつた。

先づ第一番の泥棒は卵の上へ坐つて居る鶏の卵を、人に知らさないで盗み取る事が出来る、第二番目の泥棒は歩いて居る人の長靴の踵を、人の知らない様に盗み取る事が出来る、又第三番目の泥棒は、人が食事をして居る時、其人に知らせないで旨味いものを皆食つてしまつて、其外向ひ側に居る友達さへ夫には少しも氣が付かないと謂ふ祕術を心得て居つた。

或日の事此三人の泥棒が寄り合つた時第一番目の泥棒が第二番目に向つて、

「一體君は何で生活をして居るのだ。」

と聞くと二番目の人は笑ひ乍ら云ふには、

「そりや君泥棒ぢやないか。」

「さうだ俺達は三人共如何にも泥棒だ、所で君はどんな奇術が出来るんだ。」

「俺か。」と二番目の人が、

「俺は道を歩いて居る人の靴の踵を取る事が出来るのだ、勿論盗まれて居る男はそんな事は一向御存知ないのだ、所で君達二人の出来る事は一體何だい。」

「俺は坐つて居る鶏の下から、ソット卵を盗み出す事が出来るのだ、」と一番目が答へたが續いて三番目の泥棒は、

「俺は又いくら大勢の奴が居つて食事をして居ても其人達に見付けられないで御馳走を食ふ事が出来る」と云ふ、珍無類の術を知つて御座るのだ。」

三人は此處で夫々の祕術をあかし合つて、到頭三人が兄弟分の盃をして、之から支那の王宮へ行つて一稼ぎして來ようと謂ふ事になつて三人打連れて出發した。

王宮へ來た時に三人は又相談した、どうしても王の注意を引くのが肝心だと謂ふ事で、今から二十四時間だけ離ればなれになり、翌日王宮内で會ふ事にしよう、尤も其時には王様を喜ばせるために土産物を各自持參して行くと謂ふ事に一決したから、三人は夫々思ひ／＼の方向に行つて、其翌日の正午再び王宮で相會し、分れて居た二十四時間内に起つた出來事について夫々話し合つた、其時第一番目が言ふやう、

「昨日君達と分れてから僕は唯獨り王宮内にある小屋へ行くと、

王が祕藏の鶏が孔雀の卵を暖めて居る番人が夫を夜となく晝となく嚴重に監視して、鳥を飼ふ役人の外は近寄る事が出來ないのだ、併し僕には獨特の祕術があるから、そんな事には一向平氣だ、此通り卵を盗み出して來た、今に孔雀の卵が失くなつたと謂ふ譯で大騒ぎをやつて懸賞で探すに違ひないから僕は其時之を持ち出して過分の褒美に與からうと思つて居る所だ。」

聞いて居る二人の泥棒は先づ其功績を賞して、第二番目が、
「マア聞き給へ、僕は昨日あれから内閣へ行くと王に謁見しやうと謂ふ人が大勢待つて居る、其中で僕は見付け出したのは總理大臣で大きい體軀に、美しい大禮服をつけ、新らしい靴をはいて、其邊を歩いて居るから僕は其靴の踵を取つてしまつた、勿論御當人は

知らないのだ、すると間もなく總理大臣が王に謁見を仰付けられたから、王の前へ行つて平頭低身すると王はすぐ總理大臣の靴に踵がないのを見付けたから此無禮な振舞に大に怒られ、其儘牢屋の中へ押し込めてしまつた、そして王は今晚の六時まで失くした踵が発見されないと斬首の刑に處すると嚴達したのだ、見給へ、此處に踵があるだらう、之を王に進呈すると總理大臣は屹度喜ぶに相違ない。

次に第三番目が口を開いて、

「僕は昨日あれから王の食堂へ這入つて行くと、今や王の食事の用意が出来上つた所で、其食卓の周圍には侍従長を始め下級の侍従や、料理番長以下給仕に至る迄嚴重に王の來るのを待ち構へて

居る、僕は其大勢の人の中に交つて居たが何分多人數の事とて見つかりもしなかつた、其内に正午近くなると、王が侍臣を召し連れ、て食卓につくと、侍従長から給仕に至る迄づらりと其周圍を取り圍ひで、間違のない様にして居つた、そこで僕はその中に這入つて、王の食つて居る食物をかくし始めて、瞬く内に袂の中へと入れてしまつた、其時王はやつと一口か二口食つたばかりであるから、食ひ足りない、こんな不思議な事は今迄會て起つた事はないのだ、から満堂に並み居る臣下の恐懼措く所を知らずで、やつとの思ひで早速御換りの料理を持つて來たが、其時既に王は此混雜のため、に食慾もなくなつて非常に憤怒され、料理人は勿論其場に居た人々を牢屋へ入れて、今晚まで正當な言ひ開きが出来なければ一同を

斬首してしまふと申渡した此の通り僕は御馳走を持つて居るか
ら之を出してやると牢獄に居る役員連から非常な尊敬を受ける
譯になるのだ。」

斯く三人は語り合つて、各々其功績を褒めつゝ、謁見時間の来る
のを待つて居ると暫くして大きな戸が開いて案内者が静にと言
ひつゝ、謁見室に導く途中に云ふには、

「昨日王様御秘藏の孔雀の卵がいつの間にか紛失してしまつた
から之を見付け出したものには褒美を下さると謂ふ御達しです、
また昨日の事、總理大臣が踵のない靴をはいて王様に謁見したか
ら、王様は無禮な振舞を深く憤られ總理大臣を牢屋へ入れて今晚
の六時まで申譯がたゝないと殺されるのです、之も誰か有力な

證言をする人があれば、總理大臣から莫大の褒美が出るか又は王
様から相當の賜物があるのです、之れも亦昨日の事ですが、王様が
御食事を遊ばされて居た時、誰も取らないのに食物が不足して其
場にあつた人々は皆牢屋に入れられて居ります、夫で之も六時迄
に御申開きが立たぬと首を斬られる事になつて居るのです、そし
て此事で何か確な證言を與へたものには褒美が出るのです。」
と言ひ置いて其まゝ三人を謁見室へ殘して出て行つた。

暫く待つ程もなく、前面の襖が左右に開くと王は正座について、
「一體お前達三人は何用あつて此處に參つた。」

と仰せられるから、先づ第一番目の泥棒が、

「恐れ乍ら申上げます、私は陛下に一寸とした御土産を献上致さ

うと存じまして参りました。」

と言ひつゝ、恭しく懐の中から孔雀の卵を取出して王に献上すると、王は大に喜んで早速夫を元の巢へ入れて鶏に暖めさせた、一番目が退くと今度は二番目の泥棒が、

「恐れ乍ら申上げます、私も亦陛下に差上げたいものを持参致しました。」と總理大臣の靴の踵を献上すると、王は餘程可笑しかつたと見えて大に笑はれ、總理大臣を牢屋から召出して其踵を賜ひ再びこんな間違をしない様にと注意をせられた、すると總理大臣は厚く泥棒に禮を述べて引き退つてしまつたが、次に三番目の泥棒が罷り出て、

「陛下に申上げます、私も亦御覽に入れるものを持参致しました。」

と前日王に用意した食事を其處へ取り出すと王は始めて掛りの役員の過失ではなかつたのだと知られて、皆を牢屋から放免する様に命じた。

其時王が再び三人の泥棒を前に呼び出して、

「お前達のために昨日の不思議な事が明に分つて誠に満足に思ふ、併し事實としては如何にも腑に落ちぬ事が多いから先づお前達三人に褒美をやる前に、今一度お前達の手並を見せて貰ひたい、そして其結果がよければ過分の褒美を取らさうが、若し失敗した時にはお前達三人を死刑に處する。」

三人の泥棒は少々面喰つたが仕方がない、尙王の言ふ事を聞いて居ると、

「それで試験と謂ふのは外でもない、俺は大きい寶藏の中に澤山の寶石を入れてある、其藏は鐵で堅固に作らへて夜となく晝となく一隊の兵士が夫を番して居る、お前達は明晩の六時まで此藏の中から寶石を三箇取り出して來るのだ、出來ればよし、出來なければ今言つた通りの罪だから左様心得えい。」

三人の泥棒は益驚いたが、暫らく額を鳩めて相談した末、

「出來ます事か、出來ない事か存じませんが兎に角御命令の通りやつて見ましやう、併し一つ御願ひ申したい事は假りに私共が三箇の寶石を取り出す事が出來たにしました所で、數知れぬ程澤山御藏の中にある事で御座いますから實際御藏の中から取り出して來たものか王様には御分り兼ねる事と存じますから、此試験を

やります前に一應數を御調べ下さる譯には參りませうか。」
と言ふと王も成程と思つて、早速大藏大臣を召し寄せて、今日の日暮れ迄に寶藏にある總ての寶石の數を勘定せよと命令した。

幾萬ともしれない程澤山ある寶石は、逆も少人數では晩迄に數へ切れるものではない、之は王宮の役人に手傳つて貰なければならぬ、大藏大臣はかう考へて、早速召集を行ふと幾百千とも知れない官吏が大藏省さして集つて來た。夫を見て取つて三人の泥棒は役人の服をつけて群集の中にまぎれ込み、潮の様に押し寄せて行く役人の中に混つて、難なく寶藏の中へ這入つて來る事が出來た。

寶藏の中では此處に一團かしてこに一團となつて夫々手分けし

て寶石の數を勘定しては之を帳面につけて居るから、三人の泥棒も其中に交つて數を勘定して帳面につけた後で、一寸其一箇づゝ胡魔化して知らぬ顔をして居つた、元來三人は泥棒だからこんな事をするのは御手のものだ、大藏大臣は其帳簿を一切受取つて之を金庫の中へしまつて置いた。

かくして翌日の六時になると王は三人の泥棒を呼びつけて、「お前達に吩咐けたるものをやつて居れば、約束通りの褒美を取らさうが、さもなければ三人共死刑に處するが首尾よくやつたかどうかぢや。」

と申渡すと三人は等しく御辭儀をして、無言の儘王の前へ三箇の寶石を献上した、王は聊か驚いたが尙事實をよく確める爲に大藏

大臣をしてよく寶藏の中を調べさすと如何にも王の前にある寶石が三つだけ紛失して居るから、急ぎ其旨を申上げると、王はそれでは約束の通りと謂ふ譯で、三人の泥棒に夫々高位高官を授けられ、其上土地や金を澤山頂いて、三人は段々王の信用を得て、又前に助けた役人よりは尊敬されて面白く世を送つたさうである。

(一) 鬼と獅子との話

昔ある山の岩間の洞穴の中に、夫婦の獅子が住んで居つた、そして其始めの内は四邊の小さい動物を餌食として居つたが段々大きくなるに従つて、今はどんな大きい動物でも食ふ事が出来る様になつた。

或日の事、雄獅子が何か餌食もがなと、山を歩いて居ると一寸した岩の影に、兎が寝て居るから此奴は難有いと早速食はうとする、兎は忽ち其足音に目を醒して、

「こんな小さい私などを食ふよりか、もつといゝものがありますぜ、ホラあの谷の底に池があるでせう、あの池には大きな〜動物が居て、常から獅子なんか俺にかゝつては弱いものだ、なんで高言して居ます、今私の生命を助けて下さりや其動物を誑き出して來ますか。」

兎の言ふ事を聞いて獅子は大に怒つた。

「何だ、俺よりも強いものがあの池に住んで居る？ 憚り乍らこの俺は百獸の王とも謂はれて居る獅子だ、そんな事を聞いては其

儘には置けない、貴様の生命は助けてやるから、すぐ其處へ俺を案内致せ。」と獅子は多らしい權幕。

「獅子の叔父さん、さう怒つても仕方がありません、貴君はまだ其動物がどんなに強いか、御存じありますまい、假りに貴君が戦争に負けた時には、後に残つた私等こそ惨酷なものぢやありませんか。」

兎がこんな事を言ふと、獅子は益怒るばかりで、一刻も早く其處へ案内して行けと、言つて承知しないから兎は心竊かに喜んでそれぢやよく氣を付けてと言ひ乍ら、山を下りて大きい石で出來た水のある所までやつて來た。

「さあ、貴君より強いものゝ居るのは、この中です、其縁へ上つて水の中を窺き込むとよく見えますから。」

そこで獅子は兎に欺されるとは知らないで、其石槽の縁へ上つて水の中を見ると、丁度水の面が鏡の様に光つて、恐ろしい今にも食ひ付きさうな自分の顔が水の中へ映つて居るのであつた。

「ホラ、見えましたらう、それです、随分恐ろしい顔をして居ましやう、決して喧嘩をしては駄目ですぜ。」

獅子は益々怒り出した、そして其石槽の縁の上を飛び廻つては水の中へ映つた自分の影を見て、齒をむき出して吼え猛つて居る。

兎は此處ぞと、言はないばかりに盛に煽て出した。

「決して水の中のものゝ喧嘩するものではありません、屹度貴君は負けますから、其縁の上に居て齒をむき出して吼えて居る中に向うは逃げてしまひませう。」

獅子は、今や堪らなくなつた、憤怒の有様物凄く、山も崩れる計りの唸り聲を出して、ザンブとばかり、水の中へと飛び込んだ、一度此石槽の中へ這入つたが、最後決して匍ひ出られるものではなかつた、獅子は暫らく水の中を泳いで居たが、其内身體は段々疲れて來る、兎は縁の上へ腰をかけて心地よげに石を投げたり、からかつたりして居る内に、到頭獅子は水に溺れて死んでしまつた。

これで、雄獅子を退治する事が出来たが、まだ牝獅子のある内は安心が出来ない、あれも一つ退治をしたいと思案して居ると、不圖此石槽の側に大きい真直に立つた壁があつて、夫に入口が大きくて、出口の小さい穴があいて居るのを見いだした。

そこで翌日の事、兎は悔み旁牝獅子の所へやつて來て曰ふには、

「獅子の叔母さん、一人になつて御淋しいでせう、だつて過ぎ去つた事は何と言つても仕方ありません、實はね、叔母さん、昨日私と獅子の叔父さんと不圖した事から喧嘩をしまして、到頭獅子の叔父さんが、大怪我をなさつて今谷の底で殆ど死にさうになつて居ります。」

之を聞いた牝獅子は、非常に怒つて、兎目蒐けて飛び掛つて行く、と兼てこんな事とは、承知して居た兎は一目散に、件の穴のあいた壁を目蒐けて逃げ出した。牝獅子は、一つ己れツ夫の仇敵逃して堪るものかと、今は自分の危きをも忘れて追つかけて来る、兎は壁の所へ来て其穴の中へ飛び込んで、其穴を向うへ抜けると、獅子も矢張り穴の中へ這入つて来た、併し前にも言つた通り此穴は、出口

の方が段々小さくなつて居るから兎位は通れるが、逆も大い獅子には駄目であつた。所が此牝獅子は怒りに任して疾風の如く穴の中へ飛び込むで来たので、今や狭い穴の中へ板挟となつて出るには出られず、到頭、兎に計られて其處で餓死をしてしまつた。

(一三) 狐と兎とに欺された狼

西藏のある深い谷に、一匹の年老つた羊が住んで居つて、毎年、其子羊を連れては夏の初めから、北の方にある高原へ行つては柔かい草を食ひ、又友達の羊や山羊の中へ交つては楽しく夏を暮すのが例となつて居つた。

春も早や老けて、彼是夏にならうと謂ふ或日の事例の通子羊を

引連れて、北の方の高原へと歩むで行くと、俄かに子羊が慄へ乍ら親羊の側へすり寄つて来るので、不圖頭を擧げて見ると、早や二三間先きに狼が恐ろしい顔して立つて居るのであつた。

「おや羊さん、どこへ行くのだ。」

「狼さんですか、子羊に草を食はしてやらうと思つて北の方の高原へ行くのです。」

「あゝ、さうか、併し可哀想だが俺は腹が減つて仕様がなから、氣の毒でもお前等二匹を此處で食つてしまふぞ。」

「どうか生命だけは助けて下さい、併し今は此の通り瘠せてゐますが秋になつて歸つて来る時分には、今より二匹共ずつと大きく太つて來ますから、食ふのなれば其時にして下さいよ。」

「如何にも尤もだ、それでは此秋此處でお前達と遭ふ事にして、其時食ふとしてやらう。」

と其儘狼は何處ともなく行つてしまつた、羊はやつと虎口を免れて、無事に目指す高原へ來た。そこで暫らく柔い草を食つたものだから子羊などもよく肥えて、早や立派な羊となつて來た。それで段々夏も過ぎ去つて古巢へ歸る時が近づいて來ると、羊は不圖狼との約束を思ひ出して、落膽失望したが今更どうする事も出來ない、愈歸途について、狼と約束した場所へ近づいて來ると、圖らず兎に出遭つた、すると兎は羊の情けない様な顔付を見て取つて、

「羊さん、どうしたのです、何だか今日は馬鹿に鬱いで居るぢやありませんか。」

「兎さん、どうしたらいい、でしやう、實は、」
と此春狼にあつて、約束した事を詳しく話した。

「今日か明日の内には、私等親子はあの忌な狼に食はれなければなりません、何とか兎さん、一生の頼みです、助かる工夫がありますまいか。」

と言うて可哀想に親羊は、ポロ／＼涙をこぼして居る。

「それは嘸御心配でせう、併し御安心なさい、何にも此僕に御任せなさい、決して間違のある様な事はしませんから。」

と兎は自分の體に羊の毛で織つた着物を着て、左側の耳には長い耳環をはめ、頭には當世風の帽子を着ては、親羊の背中に小さい鞍をつけた、尙其外に二つの小さい束を繩で子羊の背中に結び付け

用意が出来上ると、兎は手に大きい紙をもつて、鉛筆を小耳に挟み、羊の背中へ乗つて、さて南方さして急いで行つた。

約束の場所へ來ると早や狼が來るのを遅しと待つて居る、之を見たら兎は鋭い聲を出して、

「誰だ其處に居るのは。」

と言ふと狼は兎の余り鋭い聲に吃驚して、

「私は狼ですが、此春の約束通りに、此羊と小羊とを食はうと待つて居るのです、併し貴君はどなたですか。」

すると兎は權威を装うて、

「俺は兎だが、今度支那の王様の御使ひに立つて、印度へ行くものだ、そして途中で十枚の狼の皮を印度まで貢物に持つて行けとの

仰せである。此處でお前に遇つたのは天の賜だ、幸ひお前の皮を貫つて行かう。」
 と言ひ乍ら鉛筆を持つて携へた紙へ大きく一と謂ふ字を書き入れた、すると狼は吃驚して何事も生命あつての物種と、後をも見ずに逃げ去つてしまつた。そこで羊は大に喜んで厚く兎に禮を述べて、無事に自分の巢へ歸つて来る事が出来た。

(一三) 狐と兎とに欺された狼 其二

狼が逃げ去ると、羊と小羊は自分の巢へ歸つて来たが、丁度其の歸へり道に逃げた狼の穴の口へやつて来た。そこで一つ臆病な狼をおどかしてやらうと思つて山羊の聲色を使つて、

「さあ、狼の野郎、早く出て来い、すぐに皮を剥くのだから。」
 と言ふと狼は穴の中でブルブルと慄へて居つた。
 其内に親羊は腹が空つて来たから小羊に番をさして自分は食物を探しに行つた。

小羊は暫し穴を守つて居たが、其角を石で磨り初めると其音を聞いた狼は、

「山羊さん、何をしてるのです。」

「俺か、お前を殺すのに角を研いで居るのだ。」

狼は益々驚いて、ズン／＼穴の中に深く這入つて行くと、其内に雨がパラ／＼と降つて来た。

「山羊さん、また何かしてるのかい。」

「お前を料理する水を集めて居るのだ。」
とえらそうに答へて、今度は小羊が蹄で地面を搔き初めると狼は其音を聞いて、

「搔く様な音がするが夫は一體何です。」

「此れかい之は水を沸す爐を作らへて居るのさ、もうすぐ出来上る。」

と言つてる内に親羊が歸つて來た。

「今度は私が番をするから暫くお休みなさい、然しどうだえ何か食ひに行つて來ては。」

そこで山羊になつた小羊は狼を散々おどしてやつた事を話し、もつと何か工夫して驚かしておやりなさいと云ひ置いて、其儘親

羊の様に食物を探りに出掛けて行つた。

元來羊は溫和しい臆病な獸であるから、獨り狼の穴の口に居るのが淋しくて仕方がない、併し小羊もさつき言つた通り、努めて傲然と構へて居れと謂ふ事だから、極めて平靜を装ひ、又角を石で研ぎ出した、すると狼は穴の中から何をして居るのかと聞くから、

「お前を殺すために角を研いで居るんだ。」

と答へたのであつたが、其聲は稍々顫えて居たから、狼もさるもの、ハテナと首を傾けて、

「お前は羊ぢやないか、俺はさつきから山羊だと思つて居たが。」

「如何にも私は羊です、今小羊は食物を探しに出掛けました。」

「ぢや、今其處に居るのはお前一人か。」

「え、私だけです。」
 之を聞いた狼は非常に怒つて、よくも今まで俺を馬鹿にしやがつたと言ふが早いか、電光の如く穴から飛び出して、直ぐ様羊を食ひ殺して仕舞つて、それからすぐ小羊の後を追つかけて行つた。狼の此方さして走つて来るのを見た小羊は早くも夫と察したから山を越えては谷を渡つて逸足早く逃げて行つた。そしてやつて来た所は大きい岩が其處にも此處にも聳えて居る所であるから、思ふ様には走れない、どうした機か小羊は岩の間の狭い谷間へ落ちて足を挫いてしまつた、こんな事があつたとは知らない狼は目ざす小羊が居る谷間を飛び越えて向うの方へと走つて行つた。
 可哀想に足を挫いた小羊は動く事が出来ないから其儘ぢつと

横になつて居ると其所へ来たのは狐であつた。

「小羊さん、こんな所でどうしてさう唸つて居るんです？」

「まあ、狐さん、本當にいゝ所へ来て呉れました、實は今朝一寸した事から親羊と一緒に穴の中に這入つて居る狼の皮を剥ぐと言て、おどして居たのですが私が居ない留守に狼が其穴から出て来て先づ親を食ひ殺して私を追つかけて来たのです、だから私は一生懸命に逃げますと到頭足場を失つて此谷間へ落ち込んで此通り足を挫いてしまつたのです、狼は此所に私が居るとは知らないで向うの方へ行つてしまひましたが、かうなつては私もどうする事も出来ません、それで狐さん御願があるのですが。」
 と苦しい息の中から

「私はどうせ今に死ぬ體ですから若し死にますれば私の皮を剥いで友達の兎に私の遺身だから敷物にせよと言つて渡して呉れませぬか、其代り御禮に、貴君には此私の肉を差上げますから。」

狐も何だか可哀想になつて來たから、心よく其遺言を聞いてやると小羊は安心したかの様に、到頭其のまゝ死んでしまつた、そこで狐は其皮を剥いで之を背中に負つて今朝助けてやつた兎の所へ行く途中遭つたのは丁度さつきの兎であつた。

「狐さん、どちらへ御出掛けです、おや、背中に背負つてるのは小羊の皮ぢやありませんか。」

之は斯々謂ふ譯で今貴君を探して居た所ですと兎に話すと。

「それでは屹度私が今朝助けてやつた羊と小羊でせう、私が折角

骨折つて助けてやつたのに馬鹿な奴等です、ね、併し羊と小羊がそんな事をされては何だか氣持ちがよくありませんから狐さん、二人で一つ仇敵を打つてやらうぢやありませんか。」

狐も大に此兎の説に賛成して一緒に狼を探し行くと、ある山道で狼が死むだ馬の肉を食つて居るから、兎は溫和しく、

「狼さん、いゝ所で御目に掛りました、あのね、其處に大きい家がありませんしやう、今日はあの家で嫁入の宴會があるから屹度御馳走が澤山あるだらうと思ふのです、そんな固い馬の肉よりもつと旨味いものがありますから一緒に私等と行きませんか。」

狼は大に喜びで三疋急いで大きな家の所へ來て、人から見付からぬ様に中の様子を見ると、忙しいのは中央の方の室ばかりで、肝

骨折つて助けてやつたのに馬鹿な奴等です、ね、併し羊と小羊がそんな事をされては何だか氣持ちがよくありませんから狐さん、二人で一つ仇敵を打つてやらうぢやありませんか。」

狐も大に此兎の説に賛成して一緒に狼を探し行くと、ある山道で狼が死むだ馬の肉を食つて居るから、兎は溫和しく、

「狼さん、いゝ所で御目に掛りました、あのね、其處に大きい家がありませんしやう、今日はあの家で嫁入の宴會があるから屹度御馳走が澤山あるだらうと思ふのです、そんな固い馬の肉よりもつと旨味いものがありますから一緒に私等と行きませんか。」

狼は大に喜びで三疋急いで大きな家の所へ來て、人から見付からぬ様に中の様子を見ると、忙しいのは中央の方の室ばかりで、肝

腎の御馳走が置いてある料理部屋には誰れも人の居る様子がな
いから、三匹は静に窓から中へ這入つて旨味さうなものを鱒腹食
つてしまつた、其時兎は、

「何れ又明日になれば腹が減るのだから皆で持てるだけ御馳走
を持つて歸らうぢやないか、其れでかうしやう、僕は牛酪を持つて
行くから狐さんは君の好きな鶏の冷肉を持つて行こう、狼さんは
一番力が強いから葡萄酒の這入つた壺を持つ事にしやうぢやあ
りませんか。」

狐も狼も尤もだと此説に同意し、各自荷作らへにかゝつて兎と
狐は造作もなく牛酪と鶏肉を持つ事が出来たが、狼は酒の壺を持
つのに大分骨が折れて居るから兎は、其壺の手へ頭を通して擔い

で行けばいゝと云ふので、狼は其通りして此に用意が全くいゝか
ら早速出發する事にした、其時兎は、

「どうです狼さんと狐さん、腹一杯食べましたか。」

「まあ、いゝ加減だね、併し少し腹が減つて居つた所へさして酒を
飲むだものだから少し酔つて來た。」

と狼が言ふので、

「私も少し酔つた、何だか氣持ちがいゝから今此處から逃げ出す
のに一つ歌を歌はうぢやないか。」

と兎は發議した。

「誰から始める、第一兎さんが音頭を取つてはどうだ。」

「所が僕はスツカリ忘れてしまつて一つも思ひ出せないから狐

さんに頼まうか。」

「兎さん僕は此通りの不調法物で歌一つ知らない歌と来ては狼さんが一番上手だらう。」

「それでは狼さん、一つ得意の歌でも聞かして呉れませんか。」

「イヤ、僕にも出来ないつて。」

と柄にも謙遜するのを無理に兎と狐が郁めると、狼は危機立るに至るとは知らないで得意げに歌ひ出した、隣室で今や宴酣なる時に當り料理室の方から狼の聲が聞えて来るから二十人ばかりの客が總立ちとなつて、「ソレ狼」だと怒鳴り乍ら料理室目蒐けて駈け込むで来た。

こんな事とは豫め待ち設けて居た兎と狐は此音を聞きつけて

自分達の荷物を持つた儘逸早く窓から飛び出して逃げ落ちたが、狼は首に大きい酒の壺が付けてあるから、どうしても窓から這ひ出る事が出来ない、其内に大勢の人が手にく棒を持つて来て到頭狼は殺されてしまつた。

(一四) 鼠の國

ひかし、ある國に、一人の鼠の王さまと澤山の鼠が住んで居つた、一體鼠と謂ふものは食物にはさして不自由しないものであるが、或る年の事、穀物が穰のらないものであるから取り入れた跡へ行つても、毎年のやうにさう澤山穀物が落ちて居らない、この様子ではまだ春にならない内に食物がなくなるだらうと謂ふやうな有

様であつた、そこで鼠の王は其國の王様に翌年かへす積りで今年だけ食べる穀物を借りやうと思つて、禮服をつけて、或る朝王宮へとやつて來た、すると門に居る番人が何の用事で此處へ來たと聞く、

「少し王様に御目に掛つて御願ひしたい事があつて參りました、どうか御取りつぎを致して下さい。」

と頼むだ、門番は此事を王様に申上げると、鼠の面會とは如何にも面白い、早速此方へ連れて來いと謂ふ譯であるから鼠は恐るゝ、王様の前へ出て兩手をついて、持つて來た細い絹糸を献上した。

「何か俺に願があるさうだが、話に由つては聞き届けてもやらう。」と王は言ふから鼠は、

「恐れ乍ら申上げます、此年は御存知の通り大凶年でありまして私共一同は冬中食つて行く事が出來ないので、私は鼠の王で御座います、王様の仁慈を持ちまして冬中食へるだけの穀物を貸して頂きますまいか、來年は利子をつけて御返し申しませう。」

「どれ位穀物がいるのか。」

「左様で御座います、彼是、王様のお倉一つへ這入つて居る位あれば澤山だらうと思ひます。」

すると王さまは笑つて、

「どうしてお前達はあの澤山の穀物を持つて行く？」

「それは、私共には夫相當な仕方もございます。」

其處で王さまは愈鼠一同に一ツの藏一杯に這入つて居る穀物

を貸してやる事になつて役人を呼んで藏の戸をあけさせ、鼠の王を其中へ這入らしてやつた。

其夜鼠の王は幾百千萬もあらうと思はれる位澤山の鼠の手下を伴ひ集めて、藏の中に這入らせ、一匹づゝ出来るだけ澤山の米を口に啣へたり、背中に背負つたり又尾の中を巻き入れたりして到頭其晩の内に米倉を空にしてしまつた。

其翌朝になつて王さまが米倉へ行つて見ると昨夕まで一杯あつた米は一粒も残つて居らない、流石の王さまも大に驚かれて初めて鼠の勢力も侮る事が出来ない、考へられたのであつた、夫から翌年の春になると鼠の王は前の約束を違へず、王様から借りた米へ利息さへ添へて返しに來たので、王さまは深く鼠を信用し出

したのである。

それから暫らく經つてからであつた、此國の王さまは川一つ向うへ距てた國の王さまと戦争を始めた、此川一つ距てた隣國と云ふのは國が富むで兵が強く到底此國などの敵ではない、隣國の王は立どころに數多の大軍を川の堤へ屯せしめて、敵の侵入を防ぐ準備におさゝぐ、怠りがなかつた。

此戦争が始まると聞いて鼠の王は、自分達の住むで居る國が敵のために荒らされて、夫れに先きに親切にして呉れた王さまに萬一の事があつてはと頻りに心配して、すぐ様王宮へ來て王様に御目に掛りたいと申出でると、直ちに導かれて王座の所へ行くと、王さまは此度の事件のために、さも心配らしく鬱ぎ込んで居るから

鼠の王の云ふには、

「唯今此方へ参りましたのは餘の儀でも御座いませぬ、聞けば隣國と戦争を御始めになつたさうですが、何か手に合ふ事でもあれば仰付けられたいと思つて参りましたのです、以前私が此處へ参りました時には色々無理な御願を聴き届けて頂いた仁慈の程は死すとも忘れは致しません、今國家の危機に際しては微力乍ら出来るだけの事を致しまして鴻恩の萬分の一にも御酬い致したいと存じて居るのです。」

鼠乍らに先きの恩を忘れず、かうも言つてくれるかと思ふと王は嬉しくて仕方がない。

「如何にも其方の心掛けは誠に忝けない、が併し鼠には出来るか

しらん、數にするると我國の軍隊よりも幾倍にも當る敵軍の侵入を我兵ばかりでは到底防ぎ切れないのには殆んど當惑致して居る所だが夫ともお前に何かいゝ思案でもあるか。」

「恐れ乍ら申し上げます、以前御倉から米を運ぶ時にもそんな事が出来るかとの御疑で御座いましたが、あの通りチャンと一夜の内運びまして、翌年また申上げた通り御返し致しました、どうか陛下、少しは私共を信用して頂きたいものです、そこで私が之から申上げる二つの事を御任せ下されますれば見事敵の大軍を撃退して御目にかかせよう。」

鼠の話に王は聊か耳を傾けて、

「如何にもお前の云ふ通り、全くお前の云ふ事は間違がないから

今お前達が仕様とする事は話に依つて頼みも致さう。」

「御頼と申してむづかしい事ではないのです、明日の夕方までに長さ一尺位の杖を十萬本計り作らへて、それを川の堤へ並べて置いて下されば必ず敵軍を撃退して御目にかけます、其代りに……」

「と鼠は王さまの顔を暫らく打眺めて、
「御願がございます、其は外でもございませぬ、之から後此國に住むで居ります鼠共の生命を危くする二つの危険を除いて頂きたいのです。」

「どう謂ふ危険か知らないが俺の手に合ふ事なら必ずさう謂ふ事にしてやらうからまあ話して見い。」

「二つの危険と申しますのは洪水と猫とでございます、御承知の

通り私共の住つて居る地は川の側の低い所ですから少し川に水が出ますと直ぐに氾濫して夫がために鼠の巢が何時でも流されてしまぬます、ですから私共のために水が溢れない様に高い堤を拵へて下さる事と、今一つの猫は昔から鼠の恐るべき敵ですから、此國に居る猫をすべて國外へ放逐して頂きたうございます。」

「よし分つた、お前が首尾よく敵軍を撃退する事が出来たならば必ず其通りにしてやらう。」

と鼠の王は王さまと此通り約束をして急いで家へ歸つて来て、其翌日の夕方までに幾十萬とも知れない位澤山な部下の鼠を川の岸に召集した、堤の上には十萬本の杖がチャント並んで居る、其處で鼠は其杖を川へ浮べて筏に換へ、之に二匹か三匹づゝ乗つて

全軍が暫くの間、川を渡つて向う側の岸に上陸した。其時夜は大分更けて四邊は墨を流した様な暗であつた。敵の陣營は静まり返つて、天幕の中に寝て居るものもあれば、露營して居るものもある。併し其傍には萬一の變に具へんがための武器が澤山備へてあつた。そこで全軍數十萬の鼠は其王の命令の下に一齊に敵の陣營へとモグリ込むで、出来る丈け短い時間出来るだけの狼藉を働いたのであつた。即ち此處では弓を噛み切つて居るものもあれば、あちらでは鐵砲の臺を噛み碎いて居る、弓のつるから火繩などは皆千切〜にされて、しまひには寝て居る兵隊の衣物を噛む、糧食を食ひあらすと謂ふ風で殆ど二時間ばかりの間に全く敵の陣營を見る蔭もない様にしてしまつた。そこで鼠の大軍は再

び筏に乗つて此方の岸へと引き上げたが敵軍では誰一人としてこんな事が起つて居るとは知らなかつた。

所が夜があけると敵の陣營は俄に騒々しくなつた。十萬の大軍の叫喚は天地をも揺り動かすと謂ふ有様である。着て寝た着物は千切れ〜になり、弓のつるは切れて、銃砲の臺尻は碎かれ、火繩は粉な微塵に食ひ切られて、朝飯を焚く用意の米とて一粒もなくなつて居るから味方同士で口論が始る。こゝにもそこにも始ると謂ふ大騒動であつた。

此敵の陣營の騒動に乗じて此方の堤から二三發の鐵砲の音が聞えると、「さあ敵に知られた」と早合點して、蜘蛛の子を散らすが様に全軍はナダレを打つて散り〜ばら〜に逃げてしまつ

たのであつた。

敵軍の退散したのを早速王さまに申上げると王様の喜びは例
ふるにもものなく、鼠の王を王宮に迎へて其功績をねぎらひ、厚く禮
を述べて、直に役人に命じて川へ大な堤を作らへさせて水が溢れ
ない様にし、又全國に布告を出して、「決して猫を飼うてはいけな
い」と嚴達したのである。

夫がすむと王さまは使を隣國へ使して、此前の戦争には僅に國
中の鼠を使つて敵軍を撃退さしたのであるが、若し二度目の戦争
が起れば今度は全國の家畜を使ひ、それが駄目なれば猛獸を使ひ、
それもいけなければ今度こそ王さま自身が全國幾十萬の軍人を
率ゐて自ら陣頭に立たうと言はしたのであつた。

隣國の王は之を聞いて吃驚した、鼠だけでもあれ位の事をする
のだから外のものなればどんな憂目を見るか知れないと思つた
ので、夫には媾和をするに越した事がないと早速和議を申出で、夫
からと謂ふものは決して戦争を起す様な事なく、鼠の方でも大敵
の猫が居らなくなり、又洪水は出ないと謂ふ風で、夫れに王さまか
らは年々莫大の扶持米を給はつて楽しく世を送つたさうである。

(一五) 不具な子供の話

昔ある所に、至つて貧乏な夫婦と一人の子供があつた、此子供は
生れ乍らにして頭は前と後とが飛び出て居ると謂ふ不具者であ
るから、其顔付きと謂へば二目とは見られない様子である、兩親は

之を非常に可哀想に思つて、益注意して育て、やると、段々大きくなつて来たから、毎日、小山の麓で牝牛の番をさして居つた、こんな事をして面白く世を送つて居つたが、早や十五になると外の人様に嫁を欲なくなつて来た、併し自分では、こんな見つともない顔をして居るから、来て呉れる嫁がなからうと心配して居つたが、或日の事、いつもの通り牝牛を連れて小さい池の或牧場へ行くと、白い鴨が大空から水の中に舞ひ下つて、初めは池の周囲を右廻りに三度、次には左廻りに三度づゝ泳いで、それが濟むと又空に飛び去つてしまつた、不具者は、初めてこんな美しい鳥を見るのだし、夫に如何にも其の舉動が不思議だと思つて、チツと夫を見入つて居つた、其次の日も亦同じ所へ行つて鴨の來るのを待つて居ると昨

日と同じ時刻に又白鴨が来て水の中で同じ様な事をして居る、こんな事が四五日續いたから、或日不具者が何とかして白鴨を捕へやうと思つて、羊の毛で編む長い繩へ所々にしめ輪を作らへてそれを池の周囲へ置いておいた。

次の日になると例の通り鴨がやつて来て、先づ右廻りに泳ぎ出すと、程なく鴨の脚がしめに掛つた、不具者は、べたとばかりに走り寄つて鴨を捕へ、其翼と足をかたく緊つて、草の上へ戻つて来て暫らく考へるに、

「白鴨は難なく捕つたが一體之をどうしやうかしらん、さうだ之を殺してお父さんとお母さんに其肉を食べさして上げやう。」
こんな事を思つてゐた時に、不思議や白鴨が、口を開いて、